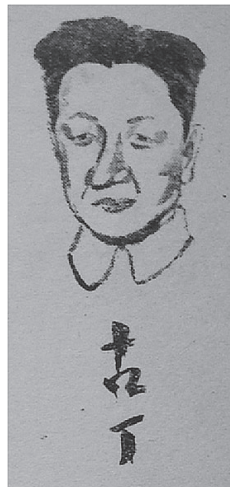


第一部 古丁の生涯



古丁の似顔絵。作者不詳、サインは本人直筆。『藝文志』第三輯、1940年。北京大学図書館蔵

第一部では、古丁の生涯について明らかにしようと思う。古丁は、五十年代に右派とされた時、自らの人生を回想して手記のよなものを書いたらしいが、筆者はまだそれを手にしていない。

ここでは、古丁の親族、特に妹の徐青の証言と、「満洲国」時代の知人の回想、そして、各時期の新聞や雑誌に残されたエッセイに基づき、第一章「誕生から大学入学まで」、第二章「北平時代」、第三章「『満洲国』時代」、第四章「『満洲国』崩壊後から死去まで」の四期に分けて、古丁の波乱の一生を振り返りながら、その思想的变化を辿ってゆく。焦点となる第三章「満洲国」時代の作品は、実質的に日本人が支配した「満洲国」政府による言論統制下で書かれたものであり、また、その政策もかなり変化を見せているため、とりわけエッセイ類からでは明らかにし得ないところも残るはずである。

古丁の思想的変遷については、さらに第二、四部で、翻訳・創作・編集出版活動について考察し、それらと合わせて、第五部で総合的に判断し、結論を出すことにしたい。

第一章 誕生から大学入学まで

第一節 生い立ち

アヘン戦争は百年にわたる中国の戦乱期の幕を開けた。とりわけ一九一一年の辛亥革命後は、侵略する外国勢力と軍閥との混戦時代となっていた。山東省や河北省の民衆は飢餓と戦争を逃れるために、簡素な荷物を担いで、はるばる関東（満洲）に辿り着き、広大な荒野を耕しながら生計を立てていた。

当時の吉林省の省都は吉林市にあり、長春はまだ小さい町に過ぎなかった。人々は、伊通河の西岸に沿って生活を営んでいた。そんな中、一九〇五年の日露戦争後、ポーツマス条約により、戦勝国日本が大連から長春までの鉄道の建設権を獲得し、南満洲鉄道株式会社（満鉄）が長春で土地を買い集めて附属地を造り始める。やがて、地元住民の抵抗に遭い、土地の購入が困難になると、対応策として、満鉄は民間の会社や朝鮮人の名義で、相場より高い値段で土地を買い続けた。長春の附属地が、大連や瀋陽などにあるような整った形のものにならなかった原因はそこにある。

長春駅の建設は一九〇八年頃から始まり、一三年には使用できるようになる。後三四年からは、大連と哈爾濱間を最高時速百三

十キロという、世界最速を誇る特急重細亜号が長春を通っていた。

日本政府の国策会社として満鉄は、関東軍に守られて、鉄道経営の他に、沿線の炭鉱開発、製鉄、港湾、電力供給、農林牧畜など各分野で植民地事業経営を展開し、膨大な資産を築き上げた。附属地にはホテル、公園、広場など近代都市に備えるべき施設が整えられ、郵便通信制度も完備された。地下水のパイプや電線などは地下に埋められ、町には「銀座」や「吉野町」といった日本名が付けられた。着物を身に纏った日本人が、本国にいるように、いや、むしろ故郷の日本よりはるかに豊かで気ままで自由な生活を送っていた。附属地は、治外法権を持ち、附属地以外の場所で人を殺すなどの死罪に相当するような罪を犯しても、いったん附属地に逃げ込んでしまえば、日本の法律に保護され、清国や中華民國の警察が中に入って犯人を捕まえることはできなかった。いわゆる、「国の中の国」であった。

満鉄は各附属地に小学校をつくり、現地在住の日本人の子どもへの教育を施すようになる。一方、一九〇九年六月からは、各附属地に蓋平公学堂をはじめとする公学堂をつくり、地元の中国人の子どもたちを受け入れた。公学堂の学制は、一九二一年から基本的に中華民國の教育制度に合わせたものとなり、初級四年、高級二年の六年制であった。教科課程も中華民國のそれを参考に作られたもので、二三年四月からは原則として初級三年より日本語教

育が行われるようになる¹。これらの規則は、一九一三年に設立された長春公学堂にも適用された。

徐長吉は、第一次世界大戦開始の一九一四年九月に長春の裕福な商店の長男として生まれた。父親の徐明遠は、一八六四年に吉林市で山東省出身の貧しい両親の下に生まれたが、店で学徒として働きながら簿記や商売の技術を学び、後に独立して商店を営むようになった。結婚して娘をもうけたが、妻も娘も亡くなってしまったため、山東省から誘拐されてきた、三十歳年下の史姓の女性を買って妻にした。長吉は、徐明遠が五〇歳の時に恵まれた唯一の男子で、その下に妹四人がいたにもかかわらず、大切に育てられた。

徐明遠の商売は好調で、かなりのお金をもうけたらしい。徐青氏は、父親は他人と協力して百貨店のようなものを経営していて、かなりの資産家だった、と語っている。また、徐長吉の小学生時代の教師、古賀鶴松は後に、「可なりの資産家の少年であった。身なりもよく、おとなしい小柄の少年であった……」²と回想している。

第二節 長春公学堂から北京大学へ

徐明遠は、長吉を長春公学堂に入学させた。中華民國の小学校

でも近代的な教育を行ってはいたが、経済力のある者は、子弟を日本が経営する公学堂に入れて先進国の教育を受けさせることを望んだ。

入学したばかりの長吉は、昔ながらの町にある自宅から、公園や高級ホテルなどが立ち並ぶ附属地に通い、その落差を毎日のように目にしていたに違いない。やがて、徐家は附属地内の入船町に転居した。長吉は、公学堂で六年間勉強の後に日本語を覚えて卒業し、奉天にある南満中学堂に進学する。

奉天は当時、北洋軍閥張作霖の本拠地で、満洲最大の都市であった。南満中学堂は、一九一七年に満鉄がつくった地元の子弟向けの中学校で、公学堂の卒業生や、予科で一年の勉強を終えた中華民国側の小学校の卒業生を受け入れていた。修業年限四年の中学堂では日本語で授業が行われ、その卒業生は、直接日本の大に入学することができた。そのため、南満中学堂の学生は豊かな経済力と能力という二つの条件を備えていなければならなかった。革靴を履き、制服を身に纏った彼らは誇りに満ち、人に羨ましがられる存在であった。長吉はそこでさらに日本語を上達させ、夏目漱石や石川啄木などの著作を通じて、日本文化や文学に親しみを覚えていった。時には、啄木の短歌を翻訳し、百霊が編集していた雑誌に投稿したこともあったという⁴。

三〇年秋、南満中学堂を卒業した徐長吉は、奉天にある東北大

学教育系に入学する⁵。満洲事変までの東北大大学の学籍簿などは見つかっておらず、在学中の一年間、徐長吉がどのような人物と親しくし、どのような活動をしていたかを知るための参考資料も見られていない。ただ、東北大の中には中国共産党の地下組織があり、大学内で左翼思想の勉強会や活動が盛んに行われていたことから、徐長吉もその影響を受けた可能性は否定できない。張作霖が設立したこの大学は、当時の中国の中でも有数の近代的教育機関で、優秀な教員が集まっていた。張作霖が爆死した後、その息子の張学良が学長となり、強力な資金援助を行っている。

三一年九月一八日、奉天郊外柳条溝で満洲事変が起こり、関東軍の砲弾が東北大の上空を飛び越えて中国軍の北大営を攻撃する。そして、間もなく奉天をはじめ、満洲全境が関東軍の支配下に置かれることになる。学長を失った東北大の存続が問題となり、南満中学堂の校長が接収のために訪れたが、教員と学生に断られたという。多くの学生が、学長であった張学良の後を追って北平に亡命した。徐長吉も、その中の一人だった。

一方、日本の占領により、地元の経済は大きな打撃を受け、徐明遠の商売を含めて、多くの企業が破綻に陥った。徐家はいくつかの不動産に頼ってどうにか日常生活を維持していたが、徐々に経済的な余裕を無くしていく。北平に逃げた長吉に月に三〇〇元を仕送りしていたが、長吉はそのまま持ち帰ってきたと、徐青氏

は語っている。

徐長吉は、附属地など日本人によって進められた近代化に接して育ち、日本の文化や文学に親しみを持っていた。しかし、関東軍の満洲占領によって大学を失い、家庭の経済状態も悪化したため、日本の植民地支配に対しては激しい憎しみを覚えたに違いない。このような親しみと憎しみという相反する二つの対日感情が、後の古丁の言動の中に明滅することになる。

第二章 北平時代

第一節 北京大学に入学

満洲事変は、北から南まで中国全土に渡って、反日救国の嵐をもたらした。故郷を追われ、南方に流れてきた東北大学の学生たちがその反日救国の強い勢力となっていく。十七才の徐長吉も、その群れに加わった。

北平に流れた東北大学生は、前学長の張学良の斡旋で、北平の各大学で勉強し続けていた。ただ、正式に在籍してはいないため、彼らの身分は「東北寄読生」や「転学生」であった。このことは、北京大学档案館に残された「北京大学名簿」（北京大学名

冊、一九三二、三三）を紐解くとよくわかる。三二年の「中国文学系一期生」（中国文学系一年級）の欄には、「徐長吉、十九才、吉林長春、北平文治高中卒業」という記録がある。つまり、十九歳の徐長吉は、三二年九月に北京大学文学院中国文学科に入学したことがわかる。また、その名前の前後に「転学生」や「寄読生」のような言葉が付いていないことから、おそらく正式の在生であったであろうと推測される。ただ、長吉の卒業校は南満中学院のはずだが、なぜか「北平文治高中」となっている。実際、長吉だけではなく、この「名冊」に登録された東北出身者の多くが、北平文治高中卒業と記されている。

北平文治高中とはいかなる学校か、なぜ東北大学の学生と結びついたのかははっきりしないが、おそらく張学良が関係しているであろう。反日救国感情が高まりを見せていた北京大学で、故郷を追われた学生たちが満鉄の南満中学院卒業だとは名乗りづらかったとも考えられる。

一方、三三年の「北京大学名冊」には、「姓名、徐長吉、県別…長春、系列年級…国二、入学年月…二十一年九月」と記載されている。「二十一」年とは民国二十一年、西暦一九三二年で、九月はちょうど満洲事変の一年後にあたる。同じく三三年の「国立北京大学二十二年度学生一覽」には、「中国文学系二年級 徐長吉、二十一才、吉林長春、北平私立文治中学卒業、在平通信処、本校東

齋、永久通信処、長春市入船町二丁目二十一番地」とある。この記録から、北京大学二期生の徐長吉は大学の寮（本校東齋）に住み、長春の自宅は満鉄附属地の入船町にあったことがわかる。また、同年『学生一覽』の休学生名簿にも、「徐長吉（二）」の名が見える。すなわち、三三年九月以降、二期生の徐長吉は休学している。

長吉の北京大学での生活の様子は、彼が満洲に戻った後、三三年一〇月に書いた小説「頹敗」にうかがえる。登場人物は寮で共同生活を送っている学生たちで、戦乱のため実家からの仕送りが途切れてしまい、生活が困窮している。彼らは授業のない土日などには麻雀で遊んだり、京劇を演じたり、詩を講じたり、翻訳をしたりして過ごしている。そのような生活について、国文系の学生、老曲は、

「これは何という生活だろうか。本は、もう読み飽きてきた。こんな状態になってしまっているのに、まだ甲骨文や殷墟……を講義する……でたらめだ」。

と、激動する社会の中で静かに勉強してはられない不満を述べている。これは、後に長吉が中国左翼作家聯盟北方部に入る原因の一つと言えるだろう。

三三年夏頃に長吉は、中国左翼作家聯盟北方部に入った。その経緯についてははっきりしないが、関係者の回想の中で、次のように語られている。

一九三三年六月中旬になり、同級生の羅振憲が、『新詩歌』を出版した人物、すなわち徐突微を発見した、と私に言った。その後、徐突微が私たちに「北平左聯」に加入したいが、と言いつ出した。私は「参加してもいい」と答えた。⁷

「徐突微」は、徐長吉の筆名である。『新詩歌』とは、徐突微が翻訳した森山啓『新詩歌作法』（未見）のことで、三三年七月に刊行された『水流』（水流社）第二巻第一期の裏表紙にその広告として、「理論の指導により、実践へ正しく導く、既刊」という一文が掲載されている。それにより、『新詩歌作法』は左翼運動の中で詩歌の作り方を教えている本で、徐長吉が、日本左翼文学理論の翻訳者として注目されていたことがわかる。

第二節 中国左翼作家聯盟北方部での活躍

中国の左翼作家聯盟は、ソ連のラップ（ロシア・プロレタリア作家聯盟）と日本のナップ（全日本無産者芸術連盟）の影響を受

け、一九二五年に成立した革命文学国際局（国際革命作家聯盟）の支部として、三〇年三月二日に上海で結成された。左聯と略称されるこの組織は、中に設置された中国共産党の「党団」の指導を受け、共産党の革命運動に呼応して活動することとなった。沈端先や魯迅などが常務委員に選ばれている。三〇年九月にその北方部が北京大学に成立する。

『左聯回憶録・下』（一九八二）中の徐希『水流社』について（關於『水流社』）には、次のように記されている。

一九三三年七月に、左聯常務委員会は再び改組された。（中略）新加入者の徐突微が組織部長となった（この人はまもなく逮捕され、特務と共に中山公園の「求今雨軒」で記者会見をして、共産党と左聯を攻撃した）。

この記述は、二つの重要な点を明らかにしている。一つは、徐突微は左聯に入るとすぐに組織部長という左聯の重要な役に任せられたこと、もう一つは、徐突微が共産党と左翼聯盟を「裏切った」こと、である。

三三年、蔣孝先が北京駐在憲兵三団の団長となり、共産党および左翼活動への取締りを一層強化した。革命を継続するために、合法的な共産党の外部組織である左翼聯盟には文学愛好者の学生

が必要であった。実際、この時左聯で活躍していたのは、ほとんどが学生である。

中国の左翼作家聯盟の文学運動においては、魯迅をはじめ多くの作家が日本の左翼文芸理論を翻訳紹介し、参考としていた。当時、北方部の学生たちは上海の刊行物で勉強していて、彼ら自身の左翼作品の創作はまだ幼稚な段階にとどまっていた。その中で、日本語に堪能で、日本の左翼文芸理論を翻訳紹介していた徐突微は得難い人材であり、その才能は高く買われた。だからこそ、三三年六月の常務委員改選時には、新しく加入したばかりにもかかわらず組織部長に選ばれ、北方部の機関誌編集などに携わることになったのだと思われる。

実際、組織部長となった徐突微は、左聯の各機関誌で活躍した。彼は、端木蕻良らと機関誌『科学新聞』（三三年六月創刊）を編集すると共に、『文学雑誌』（西北書局、三三年四月創刊）や『水流』（水流社、三三年一月創刊）に翻訳や創作を発表し、共産党をリーダーとする工場のストライキなどを支援した。また、当時の左聯は、闘争手段として、ピラ文学（伝単）小説や壁小説（壁に貼って読ませる短い小説）の他、壁詩歌の創作に励んでいた。徐突微もそのような作品を『科学新聞』に毎号のように投稿した。それらの文章のうち、今までに明らかにされたものとしては、『科学新聞』第一号の「報告文学／ピラ文学／壁小説」（報告

文学／伝単文学／頭学小説）、第二号の「労働者農民の通信員と同路人作家―左翼作家の貯水池」（工農通訊員與同路人作家―左翼作家的貯水池）、第三号の「組織活動と創作活動の弁証法的統一―文化主義と闘う」（組織活動與創作活動的弁証法的統一―和文化主義闘争）、第四号の詩「轟」がある¹⁰。その他、『水流』第二巻第一期に、詩「貴重な経験―天津恒源紗廠女工の闘い」（宝貴的経験―天津恒源紗廠工人的闘争）が掲載されている。

機関誌『科学新聞』はまだ見つかっておらず、そこで発表した作品の具体的な内容を確かめることはできないが、タイトルを見ると、紹介的な文章か小論文、あるいは詩の類と思われる。南満中学堂で石川啄木の短歌を、北平で森山啓『新詩歌作法』を翻訳していることから、当初、古丁は詩に惹かれて文学世界に入つたと考えられる。

それ以外には、在日朝鮮人である朴能の短篇小説「味方―民族主義を蹴る」、岩藤雪夫「紙幣乾燥室の女工」、古川莊一郎（蔵原惟人）「芸術理論に於けるレーニン主義のための闘争―忽卒な覚え書」を翻訳した。これらは厳密には思想傾向の異なるものであったが、当時の日本プロレタリア文学運動の最先端の作品や理論であった。中でも、朴能の短篇小説は、プロレタリアが民族を超えて連帯することを訴えたものである（これらの検討は第二部第一章で行う）。

しかし、その輝かしい時期は長くは続かなかった。これは、先の二つ目の点、すなわち、徐突微の逮捕と「裏切り」の問題に関わる。三三年七月に、徐突微は逮捕される。『北方左翼文化運動資料匯編』（一九九一）に収録された「北方左翼文化運動大事記」に、次のような記載がある。

八月四日、北平文化総聯盟、中国左翼作家聯盟、中国社会科学家聯盟等団体が、北平を訪れる反戦大会の国際代表団を歓迎するために、北平大学芸術学院で準備会議を行つていた。だが、裏切り者の密告により、会場は憲兵に取り囲まれ、會議参加者の十八名全員が逮捕された。¹¹

ここで言う「裏切り者」とは、徐突微のことである。つまり、古丁（徐突微）は、中国左翼作家聯盟の歴史の中では、「裏切り者」として記憶されているのである。

徐突微の「裏切り」については、『科学新聞』の編集者の一人、方殷や、当時左聯北方部のリーダーの一人だった陸万美なども証言している¹²。しかし、この二人が直接経験したのではなく、間接的に聞いたに過ぎない。

これについては、岡田英樹が詳しく考察してきた。岡田は、「古丁論補遺（その三）―古丁転向問題始末」の中で、端木蕻良が岡

田に送った手紙の内容を紹介している。端木は、街で人力車に乗っている徐突微に出会い、挨拶しようとしたが、徐の合図により、徐を尾行している特務に気づく。それで、挨拶するのを止めてすぐにその場を離れたため、逮捕を免れた、という¹³。

手紙は、徐突微が完全に特務側について、積極的に同志を売ろうとしていたわけではないことを示している。しかし、それがすなわち、徐突微が逮捕、尋問された時に、反戦大会の準備会の情報を当局に洩らさなかったことの証明にはならない。この問題は永遠に歴史の謎として残るに違いない。

事実として確認できるのは、三三年八月四日の大逮捕により、中国左翼作家聯盟北方部の活動が完全に破壊され、続行できなくなったことである。そこで、徐突微は北京大学に休学届を出し、すでに「満洲国」の首都・新京となった故郷の長春に戻った。後の小説集『奮飛』からは、わずか二年足らずの北平での生活が、作家古丁の思想と感情に大きな影響を与えたこと、そして、その時に負った心の傷が癒されるまでにその後六年近くの歳月を要したことが確認できる。

第三章 「満洲国」時代

三二年七月に発足した「満洲国」協和会は、「民族協和」をスローガンに掲げながら、「王道楽土」の建設を急いでいた。天津の日本租界から連れて来られた愛新覚羅溥儀が「執政」（三四年皇帝）となり、元清朝の保守官僚層や旧知識人たちは、清王朝が蘇ることを夢見ながら彼を補佐していた。それら建国組は、日本人支配者層と共に「協和服」を身に纏い、町を闊歩し、それぞれの夢を熱烈に語っていたのである。

二年しか離れていない間に街の様子が一変した長春を見て、徐長吉はさぞ驚いたことだろう。徐青氏によれば、家に戻ってきた長男の長吉は、すぐにでも就職して苦しい家計を助けなければならなかった。しかし、就職口はなかなか見つからない。公学堂時代の先生のおつてを頼り、年齢を五歳も上に偽って、三三年の末頃ようやく国務院統計処属官の職に就いたという¹⁴。

そして、三四年一〇月からの三カ月間、長吉は、内閣統計局統計職員養成所聴講生として来日する¹⁵。三五年当時、国務院総務庁統計処の最下級の統計官佐は十一人おり、長吉はその一人（委任三等七級で、給料百元）であったが、三九年には四名の事務官の一人（薦任）となる。事務官の上には、理事官二名と処長一名が

いた¹⁶。日本語に長けた長吉にとって、官僚の道で昇進を果たすことはそれほど難しいことではなかっただろう。だが、文学の夢を捨て切れなかった彼は、古丁という筆名で、作家・翻訳家として文壇に登場する。

以下、「満洲国」期十四年間にわたる古丁の文学活動を、第一節『明明』時代（一九三六～）、第二節「事務会」『藝文志』時代（一九三九～）、第三節「芸文書房時代」（一九四一～）の三節に分け、それぞれの時期における古丁の思想を見てゆくことにする。

第一節 『明明』時代

徐長吉は、「満洲国」での窒息しそうな環境に耐えられず、三六年頃から、公学堂時代の同級生で同僚の外文や、中東鉄道で働いた経験を持ち、ロシア語に堪能な疑遅らと「芸術研究会」を結成して、新聞や雑誌に創作を投稿し始める。後に辛嘉（陳松齡）も加わり、メンバーは四人となった¹⁷。外文は北京鉄路大学、辛嘉は北京清華大学の出身で、古丁と同じく左翼運動の経験者である。彼らはしばしば集まって文学を論じたり、酒を飲んだりした。

徐青氏によれば、この時期、古丁は妹の紹介で彼女の同級生の曹麗英と婚約している。父親を早くに亡くした曹麗英は、母親と姉との三人家族で貧しかったため、古丁が麗英の中学の学費を援

助し、二人は彼女の卒業後に結婚する。古丁は家庭のことはすべて妻に任せ、仕事の他、創作や文学仲間とのつきあいに没頭していたという。

一．苦悶と昇華

『東北現代文学大系一九一九～一九四九』の編集者、張毓茂は、筆者のインタビュー（二〇〇九年九月）に応じて、次のように語ってくれた。「古丁らは、よく集まっては酒を飲み、酔うと馬車に乗って町から郊外へと走り回っていた。内心では非常に苦しんでいたようだ。これはもちろん、当時の彼らの様子を知る文学者からの伝聞だが、古丁本人は当時の心境を以下のように表現している。

我々は苦悶しているのだ。当然、それぞれの苦悶には、それぞれの特殊な出発点があるが。口があるにもかかわらず、我々は「おし」か「どもり」であり続けてきた。二つの目を持ちながら、我々はいつも「めくら」だ。「めくら」でなくとも、近眼か遠視だ。二つの耳を持つにもかかわらず、我々は「つんぼ」だ。我々是一群の健全な官能を持った「不具な人間」だ。¹⁸

これは、疑滞による回想録『『明明』の思い出』（回憶『明明』）に紹介された古丁の詩で、もともと題名は付いていない。便宜上、仮に「健全な不具」と題しておく。

この詩によって、古丁らは現実を見聞きし、感じてはいるが、それについては何も意見を述べることができないう状態に置かれていたことがわかる。しかし、彼らがなぜそれほどまでに苦しんでいたのか、その理由については全く言及されていない。実際、このような原因不明の苦しみは、この時期の古丁の他の作品、特に知識人を題材とした作品にもよく見られる。第三部で古丁の作品を分析しながら詳しく検討するが、古丁らの苦悶の理由として、主に以下のことが考えられる。

一つは、「満洲国」の「封建性」である。帝政を復活させるために、「満洲国」では忠孝を重んじる儒教を必要とした。孔子廟を祀り、儒教の経典「四書」「五経」を教科書として子どもたちに礼教の道徳を叩きこもうとした。さらに、「満洲国」では四三年までに、孝子（親孝行をした人）七〇〇人、節婦（若くして夫を亡くしても、再婚せずに夫の家を守った人）二七〇〇人など、三六〇〇人余りが表彰されたという¹⁹。

何千年にもわたり中国に影響を与え続けてきた儒教、特に礼教は、「科学」と「民主」をキーワードとする中国の近代化の障害と見なされていた。中国で近代化を実現しようとすれば、まず儒教

に基づいて作られた宗族社会制度を打ち破り、個性を抑圧してきた礼教の規範から人びとを解放しなければならぬとされた。一九一八年に魯迅は小説「狂人日記」の中で、礼教を「人を食う」（吃人）ものとして痛烈に批判している。五四運動以来、中国の青年たちは、家父長制の大家族から抜け出したり、自由恋愛を実現したりして闘ってきた。そのような社会の潮流に逆らうかのように儒教を重んじる「満洲国」の在り方は、歴史を逆行しているのしか見えなかった。当時満洲にいた中国人作家の作品では、古丁の「皮箱」（一九三七）や「原野」（一九三八）を含めて、「封建的」大家族制度への批判が重要なモチーフの一つとなっている。

二つ目の理由は、「満洲国」の「植民地性」である。日本占領下の満洲では、「民族協和」が声高に謳われる一方、宗主国の大和民族と現地民族の間に大きな格差が存在していた。国務院総務庁の同僚だった古丁と外文の間で、次のような会話が交わされている。

「…この隔たりはつまり両民族間の隔たりで、主に大和民族の優越感から来たんだろう。多くの事実がある。例えば、教育の設備や商品の供給等々…このような隔たりには血肉の身ならば誰でも反感を持つんだ。平気でいられないんだ」

「あれは隔たりではない、格差というんだ。奴隷主と奴隷、征服者と被征服者の間には、必ずこんな格差があるんだ。当

たり前のことだろう。くどくど言うもんじゃなんだ」²⁰

古丁は、数字を扱う統計処に勤めていたので、教育設備や商品の供給などにおける大和民族と他民族間の格差は毎日のように目にしていただろう。

三番目の理由として考えられるのは、「満洲国」の「反滿抗日」、左翼・共産党運動に対する厳しい取締りである。三二年一〇月に「出版法」が發布され、前述の内容の出版が法律によって禁止された。そして、三六年六月一〇日、関東軍が「北滿共産党全面逮捕の命令」を出し、『黒竜江民報』の社長だった王甄海や、その文芸欄の編集者・金劍嘯他、数多くの左翼青年を逮捕し、刑死させるという、いわゆる「黒竜江民報事件」が起こる。また、三七年四月には、哈爾濱警察庁特務科が、「瀋陽の月」などの抗日歌を演奏した哈爾濱口琴社のメンバー、侯小古らを逮捕し刑死させるといふ「口琴社事件」も起こった。このように、哈爾濱を中心とする北滿の左翼活動のほとんどが取締りを受ける結果となった。この血腥さが、満洲青年、特にかつて左翼運動に投身した元革命家たちを「健全な不具」に強いる要因の一つとなった。

最後に、古丁が苦しんだ独自の理由としては、三三年に北平で革命に失敗したことによる心の傷が考えられる。

二 『明明』創刊と旧文芸との闘い

我々はみんな聡明だ。呐喊の内に生を求めなければ、沈黙の中で死ぬしかないと知っているからだ。タバコや酒や女——我々はそれらの中で自らを滅ぼしている。風花や雪月——我々は、それらの中で自己麻痺している。我々の生命はそれほど役立たずのものなのか。我々の時間はそんなに安っぽいのか。我々は苦悶している。我々は苦悶を延長するのではなく昇華するべきだ。科学的な文芸理論では、「苦悶の昇華はすなわち芸術なり」という言い方は認められないが、我々にとっては苦悶の昇華を芸術と見なすしかないのだ。²¹

「満洲国」の閉塞する社会環境の中で苦悶していた青年たちは、そのまま滅びるか、奮い立つか、の二者択一を迫られていた。元文学青年の古丁は結局、苦悶を昇華しようと、再び文学に帰っていく。疑滞の回想には、次のような言葉が記されている。

長吉は言う、「チエーホフも魯迅も医者だ、しかし、彼らは生理の病気を治すわけじゃない。彼らは人の心理の病気を正したり改めたりして、人の魂を治すんだ！ 我々は精神病院を開いて専門に人の魂を助けるんだ。この雑誌はこの方向へ

力を入れなければならない」²²

古丁らは魯迅やチエーホフに倣い、文学を用いて人の精神の病を治そうとした。すなわち、国民性の改造である。それが、彼らの文学を行う目的であった。

「芸術研究会」の面々は、エッセイや小説を書いて新聞や雑誌に投稿した。実は当時の「満洲国」には漢語文学雑誌は一つもなく、文学作品発表の場は新聞の文芸欄や総合雑誌に限られていた。当時の乏しい出版状況に、作家たちは、創作は難しいが発表はさらに難しいと嘆く始末であった。

そんな中、月刊満洲社の社長、城島舟礼が、漢語雑誌の出版を目指し、彼の出資によって三七年三月に『明明』が総合雑誌として創刊される。途中、一卷五期からは文学雑誌に切り替えられるが、事実上の最終号となった三八年九月号まで、全十八冊が刊行された。『明明』の使命の一つは、「満洲国」文壇の建設であり、古丁らはその企画段階から携わっていた。

『明明』は創刊以来、古丁らの新文壇建設の足場となり、「鴛鴦蝴蝶派」（小市民の低俗趣味に迎合する恋愛小説）をはじめとする旧文学に挑戦する文章が数多く発表された。

三七年前後の満洲文壇では、通俗恋愛小説などの旧文学が流行していた。『紅樓夢』などのように章・回に分けて書かれているの

で、「章回体小説」とも呼ばれる。涙を誘う悲恋物語が多く、一般市民に喜ばれていた。

この種の小説が氾濫した背景としては、前述したような当局の「反満反日」や左翼活動に対する厳しい取締りがある。進歩的な新文学の作者は殺されるか、上海など南へ亡命するか、筆を折るか強いられ、新文学の創作は途絶えてしまった。その中で、イデオロギーに触れない通俗恋愛小説などは当局の怒りを買わずに安全に発表することができたため、野草のようにはびこって文壇の主流となっていた。三六年には、『紅樓夢』に加筆した『紅樓夢別本』（陶明濬著）が「文芸盛京賞」を受賞している。

徐長吉はこの頃から古丁という筆名を用いて、知識人と農村・農民を題材とした小説を書き、一方、史之子などのペンネームでも数多くの闘争エッセイ（雑文）を発表した。

一方、落伍した階層に盲目的に支持される通俗文学は、死ぬ間際の輝きを呈しながら依然と強い勢いを保っている。全滿各新聞雑誌にその「作品」を載せていないものはない。通俗文学の作者は、小市民の遅れた意識を利用して、次から次へと粗末な武俠・哀情・香艶・探偵を内容とする章回体小説を作り上げ、文学の進歩を阻んでいる。²³

右は、古丁が徐勿という筆名で書いた「評陶明濬教授著紅樓夢別本」から引用した文章である。通俗文学が「死ぬ間際」にあると容赦なく指弾し、そのような小説に文芸賞を与えるのは、「通俗文学のために最も立派な広告を出すに等しい。我々の文化機関は我々にこんなにも狭き門を示してくれたのだ」²⁴と、通俗文学の発展を助長する文化機関の責任を問うと同時に、新文学の発展を阻む「狭き門」の存在を明らかにしている。

古丁は、旧文学を克服する新文学として、農村を題材とする文学を肯定的に考えていた。三七年前後は、満洲の農村の荒廃や農民の悲劇が日常茶飯事のように繰り返され、それを題材にした原稿が新聞や雑誌社に殺到し、編集者が音をあげるほどであった²⁵。この状況について古丁は、「手紙」(信)という文章の中で以下のように書いている。

農村を書くことは、文学の題材を狭めるところか、広げられるはずだ。今、我々はただ「愛」や「月」の中に閉じてもっている。今まで書かれた農村題材小説に質の良し悪しはあるが、それを別にして、少なくとも農村を書くこと自体は非難されるべきではないと思う。(略)編集室になぜ多くの農村題材の原稿が届けられるのか、これこそ問題だ。これは決して悲しい現象ではなく、むしろ喜ばしいものだ。²⁶

農村という題材は、通俗恋愛小説の「愛」や「月」といったテーマ以上に文学を豊かにし、はるかに建設的なもので、文学発展には喜ばしいことである。要はいかに農村を描くかということだ、と述べる(詳細は第三部第二章で論じる)。

やがて、「満洲国」の中国人文壇の中で、文学における農村・郷土の位置づけについて激しい論争が巻き起こり、一時期は「満洲国」の文学発展につながっていった。

三 「郷土文芸」に関する論争

では、新文芸はいかなる方向に進むべきか。これについて、満洲作家の意見は二つに分かれ、文壇での論争が長らく続くことになる。

三―一 論争のいきさつ

『明明』第一巻第三期に、疑遅「山丁花」が発表された。これは、北満洲の森林伐採労働者の悲惨な生活を描いた物語である。山に寝泊まりしながら巨木を伐採する農民、張は、年末に一冬分の給料として、家に帰る旅費に相当する額しか手に入れることができなかつた。一冬の間、厳寒を忍んで野山で働いたにもかかわらず、何も報酬を得られなかつたことを意味する。

山丁は、『明明』第一卷第五期（三七年七月）に、「郷土文学と『山丁花』」という評論を発表し、その中で、「山丁花」を「郷土文芸を代表する作品」²⁷、作者の疑運を「勇ましく郷土文芸を試みた作家」²⁸と称賛している。そして、「満洲に必要なのは郷土文芸であり、郷土文芸は現実的なものだ」²⁹と、満洲文学の来たるべき方向を示した。さらに、

我が国の文壇は、郷土文芸に重点を置いてきた。時間においても、空間においても、文芸作品の表現の意識と創作の技術は、現実に基づくべきだろうと考えられる。³⁰

と、郷土文芸における現実重視の姿勢を評価する。山丁はかつて蕭軍らと一緒に文学活動を行い、その影響を受けたといわれる。蕭軍らによる郷土文芸は、故郷・国土を強調し、日本支配に抵抗するニュアンスを持つ³¹。したがって、ここで言う「文壇」や「郷土文芸」とは、三二年一〇月に出版された蕭軍・蕭紅の短編小説集『跋涉』を念頭に置いていると思われる。

一方、三七年一〇月、奉天の青年向け雑誌『新青年』第六四号に古丁が「偶感偶記並余談」を発表し、「郷土文芸」に対して反旗が掲げられた。

それは結局人の目を惹くためのレッテルに他ならない。（略）商人が酒瓶にレッテルを貼り付けるのは酒を売るためだが、山丁はレッテルを売るために、「山丁花」にレッテルを貼ったのだ。（略）私は、本当のレッテルを貼り付けられないからといって、でたらめに他のレッテルに貼り替えることをして欲しくないのだ。（略）

文学はそんな偏狭なものではない。私は文学を狭い空間に限定することを主張しない。「郷土文芸」にもし何か論拠があるとしても、それは大豆や高粱の滓を玉壺の中に入れておいて過ぎず、見た目がいいだけだ。「松梅竹菊」を書いてもいいではないか、文芸でさえあれば。³²

「郷土文芸」に反対する理由として、古丁は、①真のスローガンの代替品であること、②文学題材の空間を狭めたこと、の二点を指摘している。まず、真のスローガンの代替品とは、何を意味しているのか。

（文学の）理論、それについて私は夢見ることができない。なぜなら、もしあれば、それは官に許可されるもののはずで、あってもないに等しいのだ。³³

右の文章は、三八年の『明明』新年号に発表された「夢語り及び唾吐き」（説夢以及唾痰）からの引用である。この文章の中で、古丁は新年の抱負として、小説や詩の創作の目標をはっきり語っているが（詳細は第四部第一章第三節で述べる）、文芸理論については悲観的である。つまり、「満洲国」では厳しい取締りにより、政府に許可されない文芸理論は存立し得ない。しかし、自分たちの文芸理論が政府に許されるはずはない、と。当局に許されない理論とは、「反満反日」か、「左翼」的なものだったと思われる。古丁の言う「真のレットル」とはそれを指していて、山丁はそれを堂々と打ち出すことができないから、代替品の「郷土文芸」を持ち出したのだ、と推察している。

では次に、「郷土文芸」は文学題材の空間を狭めた、をどう理解すれば良いのだろうか。山丁は「郷土」の内容をはっきり規定してはいないが、一般に田舎・農村・農民を連想させ、町や都市の対立概念である。満洲では都市は日本帝国主義支配下に置かれていたので、郷土はそれに対立する意味合いも持つだろう。しかしそれでは、近代化・町・労働者・知識人など、農村にないものは除外されてしまい、文学の空間も題材も狭まってしまふ。

古丁は、「天地の如き大なるものも、胡麻の如き小なるものも」「大海の如き広大なものも、粟粒の如き微細なるものも」³⁴、何でも文学に取り入れることができる、つまり、天と地の間にある人

間生活に関するすべてのものが文学題材になり得るはずだ、と言う。「郷土」も文学の題材になり得るが、それ一点に文学の方向を限定するのは良くない。しかも、満洲という、新文学の伝統が短く、作品がほとんど無いようなところで、最初から方向が規制されれば、その発展は阻害されかねない。文学は民衆の精神的な食糧であるから、特定の方向に規制されれば、新文学発展の妨げになる。日本と中国の近代文学史に詳しい古丁は、文学の豊富な内容、広範な題材、そして、その健全な発展を何より望んでいたと思われる。

山丁と古丁の食い違いの根本的な要因は、文学を何の手段に使うのか、にある。山丁や秋蜚らには、文学をプロレタリア闘争の手段、あるいは反日本帝国主義支配・反帝国主義の手段として使うという基本的なスタンスがあったと見られる。一方、古丁の場合は、根本的な立場は同じでも、文学は読者に自省と自己啓発を促す、すなわち、読者の精神に作用するものと見なしていた。これは、魯迅から受け継いだ思想と考えられる。

古丁は、三七年に『大魯迅全集』を読み、「魯迅著書解題」を翻訳している。文学をもって国民性を改造する、という魯迅の文学観に共鳴し、それを実践した。魯迅は、日本でも尊敬された中国の文学者であり、日本支配の「満洲国」では魯迅の思想を継承することは罪にはならなかった。

さらに言えば、山丁らの主張は、町と労働者を見落とすことでもあった。労働者運動を支援するために北平で闘った経験もある古丁にとって、農民・農村ばかりを重視するのは偏った見方と映ったであろう。

ただし、古丁は「郷土文芸」という言葉には反対したが、その実践方法である「真実描写」や「真実暴露」に反対したわけではない。暴露すべき真実とは、現実の中の暗い一面と考えられ、むしろ古丁らの「暗い」小説と一致していた。

三二 古丁が「郷土文芸」に反対したもう一つの理由

先行論文では、古丁が「郷土文芸」に反対した理由を誤解した解釈が目立つ。

山丁のこの主張は、農村の郷土にだけ着目せよという意味でもないし、大豆高粱だけを書けという意味でもない。肝心のなは「現実を重視」し、「時代を把握」して、文学の社会的効用を発揮することである。この主張には現実的な意味があるのだ。しかし、『明明』同人は、この意味を必ずしも理解せず、「郷土文芸」を厳しく批判した。³⁵

以上の李春燕の言い方によれば、古丁らが「郷土文芸」に反対

したのは、「現実重視」と「時代把握」を誤解したから、ということになる。だが、これは李春燕の読み間違いと思われる。古丁が反対したのは「現実重視」ではなく、「郷土文芸」というスローガンそのものであった。また古丁は、郷土文芸に関係する元満洲左翼作家、蕭軍にも詳しかった。「満洲国」を訪れた文芸批評家、浅見淵に対し、古丁は次のように語っている。

蕭軍は僕の好きな作家なので、蕭軍の作品を読んでみるかどうかを尋ねると、古丁は全部読んでみると言つて、蕭軍は英吉利のペン・クラブの會員になり、今倫敦に居るといふ消息まで告げた。それから、古丁は、

「蕭軍は本當の作家ですよ。彼は飯が食へない時から作家で通しましたよ」と、激しい口調で言つた。「僕などのやうに決して二重生活をしなかつた。作家たる者は、食へても食へなくても蕭軍の歩んだ道を行くのが本當ですよ」³⁶

古丁は蕭軍を尊敬し、蕭軍の著作を全部読んだだけでなく、その近況（延安へ行ったことも含めてである）まで知っていた。実は、古丁が「郷土文芸」という言い方に反対した背景には、もう一つ重大な理由があった。

「独立的色彩」とは、満洲文壇の新しい語彙だ。明確な解釈は聞いたことがないが、字面から見れば、「満洲の文学は必ず満洲的なものでなければならぬ」ことを意味していると推測する。(略) 私は、この新しい語彙から偏執な見解が導かれないよう、また、満洲のゲートをしつかり閉めれば、「独立的色彩」の文学が自ずから生まれてくる、と勘違いされないう願っている。³⁷

当時の満洲文壇では、いろいろと新しい語彙が飛び交っていた。古丁は、「独立的色彩」という言葉が、ゲートを閉じる、すなわち関内文学の輸入を断つ、と理解されることを危惧している。

「独立色彩」という新語彙には、「明確な解釈」があった。しかし、それは、私の憶測をちつとも超えていない。やはり、「満洲の文学は満洲的なものでなければならぬ」という意味だ。(略) でも、その論調は全く新しいものではなく、「地方色彩」の別名に過ぎないのだ。(略) (我々は) この「地方色彩」とはすなわち高粱大豆のことであることをあえて強調する。(略) しかし、我々は以前と同じようにそれを「地方色彩」と呼び、この新しい語彙を信用しない。³⁸

また、「独立色彩」は作家の文学的個性を意味する場合もある、という説明に対しては、作家の個性などは「作風」あるいは「文脈」から読み取るべききもので、やはり「この新しい語彙を信じない」(不相信這新語彙)と反論した。そしてもう一つ、明確に言えない理由があったと考えられる。

三二年に建国された「満洲国」は、外見上は独立した国の形につくられ、その「独立性」が強調されている。独立とは、一つは日本国からの独立で、もう一つは中華民国からの独立である。前者は見せかけであり、後者こそ真の目的であった。「満洲国」の中では、中国語は「満語」、中国人は「満人」あるいは「満系」と呼ばれていたが、それは、中華民国と区別するためである。「独立色彩」はそれに合致するため、古丁には認められなかったと考えられる。一方、「地方色彩」とは、満洲が中央(北京であろう)に相対する存在であることを意味し、満洲文学の中の「地方色彩」を認めることは、満洲文学が中国の地方文学であると主張することになる。このことから、日本植民地文化政策や日本文学の移植に反対する古丁の立場がうかがえる。

二〇〇七年八月に、元「満洲国」の「文選派」作家、李正中氏にインタビュールした時、氏は「文選派」と「芸文志派」の違いに言及し、「古丁らは大中国の概念を持っていた」と語った。「大中国」の概念とは、満洲を広大な中国に帰属する一地方として相対

的に見る視点を指していて、「地方色彩」にぴったり当てはまる考え方である。満洲事変後、古丁は北平に逃げ、そこで日本の満洲占領に反対する運動に参加することによって、この視点を強めたのであろう。古丁の「大中国」思想は、他にも様々なところに顔を出していたと思われる。

以上のように、古丁は、山丁らを誤解したどころか、その意図を知り尽くし、「郷土文芸」という言葉に文学上の偏狭性と政治上の危険性を見たからこそ、それを文学スローガンにすることに反対したのである。逆に、山丁らは、古丁のそのような考えを全く理解できず、階級闘争や反日本帝国主義の立場を貫くつもりで、その実、「満洲国」独立と重なる主張をし、日本植民地文化政策に反対していた古丁を猛烈に攻撃した、ということになる。

三―三 雑誌『明明』をめぐる両派の不和

三七年三月に総合雑誌として創刊された『明明』は、広汎な読者を集め、古丁らの努力によってすぐに満洲文壇の唯一の文芸誌へと転身を遂げていった（詳細については第四部第一章で述べる）。だが、そんな中で、『明明』のセクト性を批判し、不満をもちます人もいた。先にも引用した「偶感偶記並余談」中で、古丁は次のように述べている。

忽然あることを思い出した。曰く「『明明』の分派性」、何で「分派性」なのか、それは「郷土文芸」の理論およびその論者を容れないからだ。実は、これは猜疑だ。『明明』は進行する中で何らかの傾向があると見なされるかもしれないが、しかし、いわゆる「道」というものはないのだ、同時に「道」を教えていただく指導者も持ちたくない。もし、自ら指導者と認める人が、そのすばらしいと思う經典を携えてあれこれとあげつらうなら、我々は憚らずに唾棄する。「我々」とは、疑遅、孟原、毛利と私を指している。我々は、着実に創作、翻訳して、我々の文壇に作品を増やし、そして我々の文史の空白を埋める人が現われるのを期待している。³⁹

『明明』は公開的なもので同人雑誌ではない。だから、古丁以外の紳士や女史の原稿も載せられるのだ。（略）文壇は誰か個人の私産ではない。それは、愛護してくれるあらゆる人を包容して育つのだ。（略）誰か個人の私産ではないゆえ、もしそれを私物にしようとする人がいたとしても、一人占めできないことに苦しむはずだ。（略）古丁を憎む人たちは各人の作品をもって私を攻撃して欲しい。私は、喜んでこのしつかりしていない木の橋を、皆様のしつかりした鉄の橋に変えてもおおう。もし、それがかなわなくても、私の罪ではない。⁴⁰

以上のように「郷土文芸」に関する論争は、次第に創作と出版競争に変わっていき、満洲文壇はそれまでにない活況を呈するようになった。四〇年前後には、『藝文志』『文選』『学藝』などの文芸雑誌が相次いで創刊され、多くの単行本も出るに至る。その中で、『明明』およびそれにまつわる作家たちが果たした役割は無視できない。そもそも古丁が「郷土文芸」に対して論争を挑んだ背景には、論争を通して文壇に活気を生み、満洲文学を發展させる目的もあったのではないかと考えられる。

論争が始まって以来、山丁は満洲唯一の文芸誌であった『明明』から排除されてしまった。山丁グループにとっては、古丁らが『明明』を意識的に同人誌化しているように映ったとしても無理はない。その批判文の中には、文学から離れて、古丁の私生活にまで矛先を向けているものも見られる。

表面上はオープンな旗印を掲げて、関心を持つ人をすべておびき寄せる。その後、我々の水準に合わないという理由で圏外の作者を断つ。実質上、丸ごと同人誌となっている。⁴¹

どうしても私は信じない。食べ物にも着るものにも心配のない人が、酒屋に入って痛飲し、ウエイトレスを抱いてから勘定を払う。それから帰宅して、機嫌のいい時に玩具ではな

い文章を書く。その文章がすばらしいものであることを（実はすばらしいはずはない）。しかし、私は、そのような生活の中から高度な世界観が培われることは決してないし、その作品にも真の意味での価値があるはずはない、と信じている。⁴²

同様の文章は他にもいろいろあり、ほんの片言隻語さえやり玉に挙げるような批判も見られる。これらは、古丁が「作品をもって私を攻撃して欲しい」と言った後に発表されたもので、満洲文壇の論争の未熟さを示している。このようにして、二集団間の対立はますます激しさを増していった。

三―四 両グループの文学方向の一致点

古丁から見れば、新文学の蓄積が少ない満洲では、まず作品を「無」から「有」にすることが大事、つまり「写与印」（書いて刷る）を実行しなければならなかった。文学の指向や創作手法は限定せず、作家自身に任せた。「独りでそれぞれの文学道を拓く」⁴³、すなわち「方向なき方向」である。では、「方向なき方向」には、果たして本当に方向がないのか。

人に好感と美感を呼び起こすものは書かない。読んでわけがわからないものは書かない。人を楽観させるものは書かな

い。44

現実の中の醜悪さや、人を悲観させるものしか書かないという古丁の創作信条は、山丁の「真実描写」「真実暴露」の路線に相当すると考えられる。つまり、「暗い」真実を暴露するという点においては、山丁と古丁の考えはほぼ一致している。

一方、山丁も、とりあえず作品を創ることから始めなければならない、と考えていた。

我々はたくさんの食料を作らなければならない。良心的なものでさえあれば、未完成なものでも、粗末なものでもいいから、貧乏で飢えている大衆（我々もその中の一人である）に供給する。⁴⁵

三八年五月に、古丁が「荒地」（これについては第三部第三章第一節で述べる）という散文詩の中で、荒地では雑穀しか収穫できないが、それでもないよりはましだと、「書いて刷る」の主張を述べているが、右の引用は、同年六月に山丁が書いたものである。つまり、山丁の主張も「書いて刷る」に一致していたことがわかる。以上のように、創作の方向性と手法においては二つのグループ間に大した違いはなかった。それでもそれぞれのスローガンを掲げ、熱烈に論争を行ってきた理由はどこにあるのだろうか。この

点については、古丁作品の評価を絡めて、第三部第二章第四節で詳しく検討したい。

四、日中戦争と古丁

三七年七月七日、北平郊外で盧溝橋事変が起こり、日中全面戦争の引き金となった。亡国の危機に直面して、共産党と国民党の第二次合作により全国抗日統一戦線が結成され、全国民衆が抗日救国の嵐に巻き込まれていく。華北から燃え広がった戦火は、山東や河北などの省から移住してきて、いつか故郷に帰ろうと思っていた「満洲国」の「満系」を驚かせた。「満洲国」政府にとって、いかに人心を落ち着かせるかが、課題となっていた。

九月二日の『盛京時報』に、「総務庁属官徐長吉」著「日本対華的真意」（日本対華の真意）という文章が掲載された。華北と上海で進行している日中戦争の原因について解説している。

（戦争の原因は）中華民国側が日本側の真意を徹底的に了解していない、あるいは了解しようとしないうちに、日本が中国に対する真意は、一に親善、二に親善、第三に親善だ。日本が中国にそれだけ親善の熱意を示すのは、東亜の和平を永遠に守るがために他ならない。（略）（日本は）中国領

土に対しては何の意図も持っていない。敵に対してこれほど大乗な態度をとる国は、古今でも稀だ。(略)日本の上海での爆撃は、爆撃を消滅させるための爆撃で、日本の中国軍に対する懲罰の戦争は、戦争を消滅させるための戦争だ。⁴⁶

この文章に盛り込まれた語句は、当時の日本における対華戦争の宣伝文句と一致している。しかし、事実と反する宣伝文句ばかりが真面目に並んでいる文章は、説得力があるどころか、滑稽にしか感じられない。これに対し、鉄峰は、古丁が「全国人民の日本侵略軍に反抗する偉大な愛国救亡行動を攻撃している」⁴⁷と評したが、馮爲群は逆に、古丁の日本に対する「鋭い諷刺」⁴⁸と理解した。

署名から見れば、この文章は職場の仕事の類、すなわち総務庁統計処の満系官吏として、盧溝橋事変による人心の騒動を最小限に抑えようとするために課せられた任務を遂行したに過ぎないと思われる。ほかに選択肢はなく、要求された通り、日本の「大乗的態度」「爆撃を消滅させるための爆撃」「戦争を消滅させるための戦争」について説明している。古丁はこれらの空虚な宣伝文句を並べることによって、逆に、中国侵略という真の動機を隠そうとする日本の論理を明らかにしようとしたとも考えられる。つまり、「面従腹背」を装いながら、かえって逆襲に出たとも考えられるのだ。実際、古丁は「昼夜―ある詩のない詩人の日記」(晝夜―

一個無詩的詩人的日記、三七年一〇月)の中に、日中戦争に心を痛める詩人の姿を描いている(詳細は第三部第二章で論じる)。

第二節 事務会『藝文志』時代

日中全面戦争が始まって以後、日本国内では三七年九月から国民精神総動員運動が開始され、翌年四月に「国家総動員法」が公布された。ただし、国際的な孤立状態を打破するために、第一次近衛内閣は三八年一月に、日・満・華の「東亜新秩序建設」の声明を出し、一二月に「善隣友好、共同防共、経済提携」という近衛三原則を発表する。

一方、三八年五月、延安にいた毛沢東は、日中戦争における中国必勝法を分析した「持久戦を論ず」⁴⁹を発表して、全国の民衆に勇気を与えた。その日本語訳は、同年の『改造』一〇月号に掲載される。

古丁は、三九年に散文詩「独歩」を書き、「風も雨もない平和な村」への強い信念を表明している。同年の小説「鏡花記」では、明日に騙されず今日を大事にして努力しようとして反省し、『平沙』の「自序」では、満洲文学を明日への架け橋と見なし、しっかり「書いて刷る」と主張している(詳細は第三部第三章第一節で論じる)。

「満洲国」では三九年頃に「勤勞奉公」が提唱され、国家総動員体制づくりが進められた。「民族協和」が強調される一方、四〇年には、溥儀の第二回訪日をきっかけに、天照大神が「満洲国」の建国神として建国神廟に祀られるようになり、「日滿一体」化がさらに強化される。「満洲国」の「満人」知識人たちの民族意識は、かなり複雑な様相の中に置かれることとなった。

三八年九月、文芸雑誌『明明』が停刊し、「満洲国」文壇はしばらく活気を失っていたが、三九年に入って、国務院民生部の外局に位置づけられた満日文化協会が「民族協和」方針を強め、「満人」文学出版の支援を始めた。六月には芸文志事務会が結成され、文芸誌『藝文志』を創刊し、四〇年六月までに全三輯を刊行している。

他方、前述のように、「郷土文芸」に関する論争が創作と出版の競争を生み、各種の文芸誌が誕生した。『文選』（文選刊行会、三九年二月創刊、二輯で停刊、文溯書局）、『作風』（作風刊行会、四〇年十一月、一輯のみ）、『学藝』（学芸刊行会、四一年二月創刊、二輯で停刊）が刊行され、新京、奉天の文学グループが活発に創作と出版に取り組んだ。この頃が、「満洲国」「満人」文壇の最も盛り上がった時期であった。

この間、古丁は翻訳と創作に打ち込み、長編小説『平沙』（一九三九）と、夏目漱石の長編『こゝろ』（一九三九）の翻訳を世に送

りだした。三九年八月には詩歌叢刊行会と満日文化協会を発行元に「詩歌叢刊」の刊行が開始され、シリーズの一冊として古丁の散文詩集『浮沈』も出版されている。そして、古丁は、三九年一〇月に短編小説集『奮飛』で文芸盛京賞を、四〇年四月に長編小説『平沙』で民生部大臣賞を受賞した。それを機に、彼は、「満洲国」における「満人」作家の代表と見なされるようになる。

芸文志事務会は野心的な出版計画を打ち出し、どんどん刷っていきこうとした。だが、体制側の資金援助を受けた以上、その方針と折り合いをつけねばならない。古丁らは、自分たちの文学的理想を守るために苦心した。漢語を守る態度を鮮明にしたのも、その一つである。これは、従来論じられてこなかった一面である。

一．「漢話」への態度

三八年頃から朝鮮半島では皇民化政策が実施され、学校では国語として日本語教育を行い、朝鮮語の教育が禁止された。役所でも日本語が強制された。

「満洲国」では、三七年五月に「勅令」により、「学制改正令」や「学制要綱」などが公布され、三八年から日本語を「国語の一つ」として国民学校等で指導するようになる。ただ、例えば蒙古人居住区では、この学校令により、蒙古語の他に、しばらく二つ

の国語、すなわち漢語と日本語が同時に教えられていたが、次第に漢語の時間数が減り、日本語の授業が増えていったという⁵⁰。こうして、日本語を第一国語とし、事実上、各民族の共通語にしようとする政策が進んでいった。「満語」（中国語）教育のテキストでは、中華民国側が使っていた漢字の発音を表示する注音符号が廃止され、代わりに日本語のカナ、いわゆる「満語カナ」が使用されるようになった。

このような事態の中で、三九年九月、民生部、建国大学、満日文化協会を発起団体として「満洲国語研究会」が設立され、満語・日本語版の雑誌『満洲国語』が刊行される。会の目的は二つあった。一つは、「国語」の研究。つまり、「日語」と「満語」の標準語の語彙の整理、発音の統一、外来語の制限や統制などを調査し研究すること。もう一つは「国語」の普及で、主に日本語の普及に力を入れることだった。「満洲国」には二千万人以上の「満人」がいて、その大部分は農村に分散していた。都市部の子どもなら学校で日本語教育を受けさせられるが、農村部には学校が少ないため、日本語教育の普及が問題視されていた。農村の人たちに何らかの形で日本語に触れさせようと、いろいろな方策が打ち出された。

「満語」版『満洲国語』は、四〇年六月から四一年三月までの八期にわたって発行された。その編集者は、芸文志事務会のメン

バー、陳松齡（辛嘉）であった。古丁をはじめ、事務会のメンバーのほとんどが、この国語研究会に入っていた。

この時期、古丁は、「注音符号のこと」（史之子署名、三八年八月）を『月刊満洲』に、「話の話」（四〇年九月）を日本語版『満洲国語』第五号に発表している。この二つの文章の内容は、「作家が母語で創作すること」と、「注音符号を守ることに、まとめることができる。

「話の話」では、古丁はまず「漢話」に対する思いを訴えている。「勤務中に『漢話』の話をするのが非常に少なく、求智的に退席してからも『漢話』を読む時間が少ない」ので、「『漢話』に侘しい郷愁を感じる」⁵¹。なぜなら、「私は『漢話』を離れては無一文になる文学者だからだ」「私の詩も漢話の中にある」と言う。

官庁の通用語は日本語で、漢語の出版物が少なく、漢語への郷愁を感じる。この一文から、作者の漢語存続への危機感が読み取れる。そのような状況の中で、「最近、私たちに對して時折呼びかける言葉を聞く、それは日本語で書けという注文である」と、古丁はその呼びかけに對抗する姿勢を示している。「私は（作家を）言語技師だと認識している。その技師が自己の母国語（で）さえ創造できないのだから、外国語で何が創造できよう」。続けて古丁は、言語技師である文学者は、「話」を発掘し、彫塑し、描写し、演奏するとし、「小松の感覚の探検が語脈を豊富にし、爵青の文章

の探検が語法を精密にした、また、石軍の聴覚の探検が語彙を活発にした」と、述べている。

作家は母語で創作するべき、という古丁の意見に賛同する日本人文化人もいた。四〇年、「満洲国」の使節として日本紀元二千六百年の記念式典に参列したのを機に、古丁は『文学界』四月号に、「満洲文学通信」という文章を寄稿した。その中で、「ことばに関する問題に就て島木健作氏、小林秀雄氏が満洲語で書くのが当然であると言われ、林房雄氏は、五十年後は日本語で読み書きをするであろうと言われた」⁵²と書いている。また、「話の話」では、日本語で書けと呼びかける人びとを「ジャーナリスト的文豪」と称し、「ただ臨機応変に文化の刺激を追求することを知らず知っているだけで、なぜ文化建設に参加すべきかを決して知らない。若し根本から文化建設の意欲が無ければ又自ら別論すべきである」⁵³と、鋭く批判している。

満洲芸文聯盟の機関誌『藝文』の四三年八月号に、「小林秀雄を囲む」という座談会記事が掲載されているが、出席者の中には「満人」作家として古丁と爵青の名も見える。この中で小林が、「僕はジャーナリズムから遠ざかった」と発言している通り⁵⁴、古丁の「ジャーナリスト的文豪」に対する批判は、この時期の小林の論調と一致している。古丁は日本語でエッセイを書いた（『朝日新聞』『文芸春秋』『藝文』『満洲国語』日語版等に寄稿した）が、

小説などは漢語で創作しなければならないという立場を守っていた。他の日本人作家との会見においても、その態度を表明している⁵⁵。

「注音符号」の中で、史之子（古丁）は、「注音符號が廢止されたと云ふ。教科書を見ると確かに見當らない。何でも假名で置き換えるさうだ」⁵⁶と述べてから、仮名で北京音を表示できないことを例証して、最後にこう結ぶ。

私は注音符號といふものには、原來、愛も憎しみもない。私は寧ろ漢字廢止論者に好感を持つてゐる方だ。だが、廢止しない以上は、矢張り幾千年の歴史を辿つて來た注音符號で、漢字の音を表した方が無難である。注音符號丈けではない。何をやるにしても、其の歴史を一寸覗くことが肝腎であると思ふ。——悪いものはこれを殺し、良いものはこれを生かすべきである。⁵⁷

古丁の注音符号に関する知識のほとんどは、黎錦熙の『国語運動史』（一九三五）から得たものだったが、上記の文章から、古丁は、ただ注音符号を守ろうとしただけではなく、「満洲国」の政策を批判していたことがわかる。古丁は、「満洲国」の日本語をもって漢語に取って替えるという、公には言えない意図を見抜いてい

たが、それを真正面から批判するのを避けて、注音符號と仮名の優劣について論じて見せた。一見、安全な対処法のように見えるが、その真の意図を当局に分析され、警戒されたであろう。しかし、古丁はこのような批判方法をよく使っていた。

「話の話」の中で、さらに古丁は注音符號の優れた点を強調している。山東訛りで書かれた白話小説、蒲松齡の「鬼狐伝」や「金瓶梅詞話」に登場する漢字（擬音語）を例に、漢字で音を表す場合、その読み方を表す注音符號がないと意味がないと言い、注音符號の必要性を訴えている。六朝を訪れた日本の留学僧が漢字から仮名を作り、その仮名が再び中国に逆流入して注音符號となった。「併し、『拼音』上では『注音符號』は『カナ』に勝っている」⁵⁸という長谷川如是閑の文章も引用している。このように古丁は、「『カナ』を漢音の音標としてもかならずしも日本語の普及を成しとげることが出来ない」と、「満語カナ」を使って日本語を普及しようとする動きに反対したのである。にもかかわらず、四〇年一〇月になると、注音符號は禁止されてしまう。

一方で、古丁は漢語の改造も主張している。「話の話」では、漢字自体に欠点があり、「漢字はもう私達の文学的表現を十分に満足せしめることが出来なくなった」と述べる。それを「一層豊富に、一層精細且美麗にしたいからこそ、外との通路にある門を明けて、出来るだけ寛容鄭重に彼女以外の言語を迎へたい。そし

て、迎へた彼女の語彙ばかりでなく、語法も語脈も吸収したい」と、外国語から語彙や文法を取り入れて漢語を改革しようと主張した。それにはまず、小松や爵青のように、作家として話を発掘し、彫塑、描写、演奏し、言語の探検をする。そして、「標点符號」である「：」「；」「，」などの多様な句点の使用を提唱する。当時の満洲では、漢語文章に日本語と同じように「、」や「。」しか使わない人もいたが、古丁は英語由来の句点の使用を主張した（言語問題については、古丁の翻訳実践に関係して第二部で詳しく検討する）。

二、「そっくりそのまま頂戴する」

東野大八『没法子北京』^{（イェンズ）}（蝸牛社、一九九四）に、以下のようなエピソードが記されている。四五年九月、終戦直後の北京で、月刊満洲社の記者だった安藤良介が、町で人力車を引く徐百靈に出会う。徐百靈は、古丁の幼なじみで文学仲間でもあった。「ジンギスカン」という長編歴史叙事詩をはじめ、『明明』『藝文志』誌上で多くの詩作を発表している。

安藤良介と徐百靈の二人は、五年前に満洲を離れた時の送別会の思い出について語り合う。

「なあ、徐君。(略)われわれの送別会をやってくれたね。

その折、古丁がこんなスピーチを一席ぶつたことを覚えてるかい。満州国の國務総理張景恵が、こっそり誰かに、満州国は、叛帝王芥ママの新的治世十三年より短いだろうと言ったそうだが、おれはちがうね。満州国はただか一〇年の命脈しかない。だからさ、日本帝国が国都新京に大都市計画を樹ツてどんどん大金をつぎ込んでいる。結構な話じゃないかね。自分にやって頂戴。今にそっくりそのまま、われわれが、お礼も申さずいただいてしまうんだから……。そういつて奴は、上を向いてアツハツハと笑っていた。言論統制まことに厳しい戦時下だよ。みんな度肝を抜かれてポカンとしていたじゃないか」

「忘れやせんよ、あの席にいたものみんなだ。満州国万歳、愛新覺羅溥儀万歳と、侵略する側に立つての偽装で、みんな心なぐのたうち回っているのに古丁の奴、少しの日本酒に酔って人前で本音を口にして喜んでいやがる。まあ、仲間たちの面従腹背ぶりの苦しみを嗤うと同時に、自分自身にも腹をたてているうつつ積ぶりはよくわかるがね。さすがのおれも二の句がつけず呆れかえったものだった。」⁵⁹

ふだん穏やかな古丁も、酒に酔うと人が変わったように本音を

吐くところがあつたようだ。これに似た台詞を聞いた日本人では他に、山田清三郎・浅見淵・北村謙次郎などもいて、それぞれの回想録の中で同様の内容を記している。日本文学の間では、よく知られていたことらしい。北村謙次郎の回想では、日本文化人と一緒に飲んでいた古丁が、新京の新しい建造物が話題に上ると、「なあに、ああいうものも、そっくりそのまま頂戴しますからね。心配ないですよ」⁶⁰と言ったという。これについて、北村は、

古丁先生がどれだけ偉い八卦見か予言者か知らないが、出上がつたものを、そっくりそのまま頂戴する気で眺めているのだ。満州国だの共和政治だの、日本人が知恵をしぼつて、あの手この手と漢民族を懐柔しようとかかっているのに、相手は委細かまわず、いずれまた「中華」本来の姿に返ることを信じて疑わぬ強靱さである。⁶¹

と評している。また、尾崎秀樹はこのエピソードを引用して、

「そっくりそのまま頂戴する」という言葉は、酒席で座興にいわれただけのものではなく、満洲の自然と人に対する限りなき愛と、信頼が言わせた底意地の表現なのだ。「王道楽土・五族協和」の美名にかくれた日本の大陸侵略が、その瞬間み

ごとなうっちゃりを喰ったといえる。⁶²

と分析している。では、このような古丁の発言はどこから来たの
だろう。その考えはいつ頃から古丁の中に芽生え、きっかけは何
だったのだろうか。

いくつかの可能性が考えられる。一つは、東北地方に住んでい
た人々の経験である。清、ロシア、張学良、日本というように権
力者が常に変わっている。古丁の父、徐明遠は商売で大儲けをし
たが、政権が変わると今までの紙幣がただの紙くずになってしま
うという虚無も経験した。同じことが何度も繰り返してこつたた
め、民衆は政権の長期存続を信じなくなり、「満洲国」もすぐに崩
壊するだろうと思っていたにちがいない。総理大臣張景恵もそう
考えていたし、満洲事変を調査したリットン調査団の調査報告書
にも、「満洲国」は絶対長持ちしないと断定されていた。

さらに毛沢東の「持久戦を論ず」でも、理論上、中国の必勝と
日本の敗戦を分析している。この文章の中で毛沢東は、亡国論と
速勝論を批判し、日本と中国の現実を詳しく分析して、中日戦争
は持久戦だと力説している。

日本の長處はその戦争力量の強さにある、そしてその短處
はその戦争の本質の退歩性、野蠻性にあり、その人力、物力

の不足にあり、その国際的な援助の少ないことにある。⁶³

中国の短處は戦争力量の弱さだ、而してその長處はその戦
争の本質的な進歩性と正義性にあり、その大國家であるこ
とにあり、特に国際的な援助が多いことにある。⁶⁴

そして、その結論として、

いかなる条件の下において中國は戦勝し、且つ日本の實力
を滅ぼし得るか。

いふに、それに種々の条件がある、第一は中國の抗日戦線
の完成、第二は國際的抗日統一戦線の完成、これらの条件の
中でも、中國人民の大聯合が主要なものだ。

若しこの条件が急速に實現することが出来なければ、戦争
は延長する。しかし結果は同じだ、日本は必ず敗れ、中國は
必ず勝つ、だが犠牲が大きいであらうし、ある非常に苦しい
時期を経過しなければならない。⁶⁵

とまとめている。日本は敗れ、中国が勝つための二つの前提条件
のうちの一つ、国内抗日戦線は、一九三六年二月二日、西安
事変をきっかけに結成された。では、国際的抗日戦線はどうで
あったろう。三七年一二月に南京大虐殺を起こした日本軍は、国

際的な孤立を決定的にし、それまで対ソ戦略から静観する立場を取っていた米英が中国支援の姿勢を明確にした。日本のジャーナリズムにおいては三八年夏頃から、「真の敵は米英」という声が高まったという⁶⁶。これでは、英米を中心とする国際抗日戦線の結成は目に見えている。古丁は日本のジャーナリズムの動向を良く知る立場にいたので、このことを察知していても不思議はない。

つまり、『改造』に発表された毛沢東の「持久戦を論ず」を読むことにより、古丁の満洲国民としての直感には理論化され、「満洲国」の即座の崩壊を一層確信したと考えられる。これは推測に過ぎないが、可能性は高いだろう。なぜなら、当時『改造』は満洲でも販売されていて、古丁が「求知」するための必読雑誌の一つとなっていた。また、中国の命運に関心を持つ者なら、毛沢東の「持久戦を論ず」を見逃すはずはなかっただろう。

実際、古丁は、「そっくりそのまま頂戴する」という考え方を心の底に育てていただけでなく、三九年に発表した散文詩「独歩」で「風も雨もない平和な村」への強い信念を示すと共に、同年の小説「鏡花記」にも「明日に騙されずに今日を大事にして努力しよう」と書いている。また、『平沙』『自序』の中で、満洲文学を明日への架け橋とするためにしっかりと「書いて刷る」と、主張している（これらの作品については第三部第三章で論じる）。

しかし、それを改めて、日本人の前で口にする人間は、古丁の

他にはあまりいなかったであろう。もちろん一緒に酒を飲み、密告などしないと信じてることができた相手に対してだけだったろうが。とすれば、古丁がどれほど「満洲国」の「民族協和」を謳う言動を取ったとしても、それは一時しのぎにすぎず、古丁もほとんどの「満人」たちと同様、「面従腹背」だったという結論に落ち着くだろう。しかし、そのように言い切るのはまだ早い。全く予測しない事態が古丁を見舞うからだ。

三、健康隔離

四〇年秋、新京でペストが流行り、東隣に死者が出たため、古丁一家も一カ月近く健康隔離生活を強いられることとなった。この隔離生活は、古丁に大きなショックをもたらした。

去年の秋、私は外文、辛実と一緒に西安県のある村へ小説の素材を探しに行った。構想、理念はすでにできていて、いざこの野心的な作品を執筆しようとした時、新京の自宅の東隣にペストによる死者が出たので、私の一家の生命と財産は脅かされることとなった。郊外の千早病院に一カ月近く隔離され、疫病の犠牲となつてしまい、再び創作しないだろうと思っていたが、幸い命も財産も助けられた。これは不幸中の

幸いと言えるだろう。しかし、それ以来、私の精神は大きく揺れ始めた。

病院を出てきて、友人たちは喜んでくれたが、私は大きな悲しみの中に陥っていた。

私が乗り越えたのは死線なので、人生をいくら「清談」しても、なかなか理解されない。私はすっかり孤独になってしまった。それ以来、私の取った言動は一般の友人に反対されるものとなった。

私の精神の大動揺は、今日まで止まらずに続いている。⁶⁷

古丁はその精神の「揺れ」を長編小説「新生」に盛り込み、四年に発表した。この作品によると、隔離病院での体験は、民衆の民度の低さや文学の無力さなどについて、古丁が改めて考える契機をもたらした。ところがその後、安全に病院から出られたにもかかわらず、かえって「大きな悲しみの中に陥ってしまった」のはなぜだろうか。

去年新京にペストが流行した時、(略)古丁もその一員である満洲文話會が、それまでどちらかといふと古丁をちやほやしてゐたのに、色々な関係から急に冷淡になつて、別に義捐金も集めて呉れようとはしなかつた。古丁は不時の災難とは

言ひながら家を焼かれました上に、文話會のさういふ冷淡な態度を見せつけられてすっかり悄氣込み、當分筆を折つて満洲文壇から離れる決心をして、田舎への轉勤運動をしきりにしてゐるといふのである。⁶⁸

以上は、浅見淵が山田清三郎から聞いた話として書いていることである。家を焼かれたのは古丁の妹徐青氏の証言で誤解だとかつたが、古丁の辞職と轉勤運動は確かである。日本人の冷淡云々も事実と思われる。冷遇されたため、轉勤することにしたのだろう。では、古丁はなぜ日本人に冷たくされたのか、その主な可能性としては二点考えられる。

一つは、当局の怒りを買ったので皆に避けられたこと。総務庁の参事官岡田益吉は、事務会『藝文志』創刊号に寄せた「満洲文学者に希望する」(所望於満洲文學者)という文章の中で、今までの写真主義を「人殺し」とし、それを書いた作家を「歪んだ人間」と断定して、満洲の文学者に満洲建國と東亞新秩序の夢を織り込んだロマン主義を求めている。ところが、事務会のメンバーはそういう「ロマン主義」文学を一つも書かないばかりか、事務会発行の「讀書人連叢」刊行の辞では、「讀書人ではない人の指図を断り、文学の「浄土」を守ると宣言した(詳細は第四部第二章で考察する)。このような当局の話を聞かない反抗的態度に目を付け

られた可能性が高い。実際、当時の芸文志事務会はすでに特高と憲兵に監視されていた。満日文化協会の主事、杉村勇造は回想の中で、甘粕正彦との付き合いに言及し、以下のように語っている。

私としては満洲系の青年が逮捕されると、その釈放を頼みに行くのが仕事だった。当時の若い知識分子は年毎に中国共產黨員になって暗躍するようになってきたので、私の事務所には毎日のように特高と憲兵が来るようになった。⁶⁹

杉村勇造の事務所は、すなわち芸文志事務会の事務所であった。また、岡田英樹『文学に見る「満洲国」の位相』に引用されている、古丁の同僚・内海庫一郎の回想には、自宅を訪れた内海に対し古丁は、常に自宅に憲兵が立ち寄っていると語った⁷⁰、と記されている。内海の古丁宅への訪問時期ははっきりしないが、状況から見て古丁の健康隔離前と思われる。

さて、古丁が冷遇されたもう一つの理由は、酔うと日本人の前でも「そっくりそのまま頂戴する」と演説したこと。この言い方には「反満」だけではなく、日本人の「満洲国」や大東亜建設の「ロマン」を揶揄する態度がうかがえる。

以上のように、健康隔離前からすでに監視されていた事実から、出所後も文話会の日本人文化人に避けられたことは容易に理

解できる。また、すぐ後で述べるように、古丁が辞職勧告に等しい待遇を受け、やがて正式に辞職に追い込まれた可能性もある。孤立し、職場を追われた古丁が、悲しみに陥っても不思議ではない。

四一年一月、「国務院総務庁分科規程」が發布され、これにより、文化事業についての権限（検閲を含めて）が、民生部から国務院弘報処へと一元的に集中することになった。言論出版のすべてを戦争のプロパガンダにするための処置である。芸文志事務所と民生部の外局だった満日文化協会との関係は、これによって断たれることとなる。この体制再編が、四一年五月に役所勤めを辞め、一〇月に出版社兼書店である株式会社芸文書房の設立を古丁に決意させたと考えてよい。

第三節 芸文書房時代

一．芸文書房

芸文書房（合資） 新京長春大街一一七（電二一一三九二）

社長 徐長吉 営業局長兼徐長吉 出版局長 趙孟原 企画

部長 滕毓鑫 図書部長 単更生 営業部長 唐松亭 販売

部長 趙振興⁷¹

右は、四三年に満洲芸文聯盟が発行した『満洲藝文年鑑』の「出版社一覧」のうち、芸文書房に関する記述である。古丁は社長兼営業局長、小松は出版局長、外文は図書部長を務めていたことがわかる。

芸文書房の設立の経緯については詳しい資料がまだ見つからないが、四一年一〇月の設立当日の様子は、『満洲評論』に載った矢間（大内隆雄）の次の文章からうかがうことができる。

満洲文学のホープである古丁、小松、外文等の諸君がみな官や職を辞して、新京で本屋を始めた。出版業であり、本を賣る店でもある。讀書週間の一〇月一日賑やかに開業した。

満系出版界の不振は周知の事實であつた。これらの諸君が自ら資本を集め敢えてこの仕事に乗り出したのは、無論そのやうな現實を残念だとしての行動なのであらう。相當な職場を辭してのこの創業は背水の陣を布く覺悟あつてはじめて出来たことであらう、その意氣や壯とすべしである。（略）

芸文書房は新京のいはゆる城内の中心、大馬路に長春大街が交叉する四つ角を數軒東に入つた所にある、新しい建物である。直ぐ斜め前には大きな満系映画館の國都電影院がある。附近には益智書店や商務印書館などの舊來からの本屋もある。場所としては良い位置に在ると言へよう。（略）

ほかの満系書店と比較して一つの著しい特徴は、日本の書籍がかなり澤山並んでゐることだ。それもしつかりした選擇によつて選ばれてゐることが一々見て行つてうなづける。

日本の本もかなり賣れますよ。開業の日に、古丁さんはさう語つてゐた。（略）芸文書房のマークは綠色で圓の中に駱駝が一匹ゐる圖である。

駱駝は何の象徴です？

私が聞くと、

漫々マツ的といふ滿人の性格ですといふ返事であつた。

ハハア、砂漠を行くその意氣込みなんだな、水が無くたつて頑張つて行こうといふその逞しさなんだな、と私は心の中でうなづいたのであつた。

芸文書房の誕生は新京の文化界に清新なものを齎した。72

以上の文章からいくつかの問題を考えてみよう。まず、「背水の陣」とは、古丁も小松も外文も、元の職場を辭めて芸文書房の経営を始めたことを指している。特に古丁は、総務庁統計処の事務官という、まさに「相當な職場」を辭めたのである。

外文も総務庁に勤めていた。小松は満洲映画株式会社の社員で、『満洲映画』の編集をしていたが、『満洲映画』が満洲雜誌社から発行されるのに伴い、満洲雜誌社に移っていた。しかし、小

松はそこも辞して、芸文書房の出版局長になったのである。

この間、私は外省に転勤のためにあちこち奔走していた。主にペストから離れたかったからだ。私は家を一軒売り、県長に混じって学生になった（転勤のための研修と思われる——引用者注）。それから、九年間勤務していた役所を離れて、ある半官の民間団体に派遣され、その末席に就いていた。（略）生活がこのように行き詰まり、精神がこれほど激しく揺れ動いたら、どれほど丈夫な精神の持ち主でも、狂いそうになるか、そうでなければ、痴呆症にかかりそうだ。しかし、私はまだ野望を抱えていた。それは出版界でより良い本を印刷して出すことだ。しかし、これはあまり期待できそうにないようだ。なぜなら、私は一度統計官になったことがあるとはいえ、足し算でも指を数えてやらなければならぬほど計算ができず、商売を知らず営利を心得ていないからだ。（略）しかし、私はまた考えた。死線を乗り越えてきた以上、行き詰まっても何も恐れることはない、と。⁷³

右の文章の中で古丁は、「生活がこのように行き詰まり、精神がこれほど激しく揺れ動いた」と言っているが、原因については語っていない。辞職の理由として、「主にペストから離れたかった

からだ」と述べているが、その時ペストはすでに治まっていたはずで、それは口実に過ぎないと思われる。あるいは「ペスト」は何かを暗示しているのかもしれない。それについては、ここでは謎のまま残しておくしかないようだ。創作や翻訳について考える中で、ヒントが見つかるかもしれない。

先に引用した大内の文章によると、芸文書房は、他の満系書店とは異なるいくつかの特徴を持っていた。①日本語の本も売っている。②厳選した本しか売らない。③書房のマークは駱駝である。

古丁は日本の出版界を良しとし、それに学ぼうとしていた。『光明』時代の「城島文庫」や、芸文書房設立後の「学生文庫」をはじめとする各種の企画には、日本の出版界の影響がうかがえる。日本の支配下に置かれていたため、日本語の本を嫌う人もいたが、それは偏見だ、と古丁は言っている。

私は常にある種の偏見を耳にする、すなわち日本語の本を読まない、と。これは全く間違った知見だ。そういう傾向が無ければ喜ぶべきだが、あれば早く直すべきだ。⁷⁴

漢語の出版物が少ない「満洲国」では、日本語の本を拒めば、知識への道が閉ざされてしまう。翻訳などを通して漢語を守り、漢語書籍の出版を進める一方、日本語の書籍を認め、厳選して読

者に提供する。これが古丁の態度であった。日本語の本の選別基準は、面白さ、知識の豊富さ、また、時局に対する認識を深めるかどうかなど、市民教育に相応しい類のものであったであろう。

「駱駝」についても考えてみたい。実は、これは『明明』の創刊時、新雑誌のタイトル候補の一つとなっていた。芸文書房から出版された本の裏表紙の駱駝のマークをコピーして並べてみると、足の位置がそれぞれ違うため、まるで駱駝が歩いているかのようだ。沙漠の中を行く駱駝は、堅実・忍耐・希望の象徴である。植民地満洲の文化沙漠の中で、次のオアシスに向かって駱駝のように忍耐強く歩いて行こうという、経営陣の心意気を示したものと考えられる。また、駱駝はオアシスからオアシスへと歩くため、昨日から明日へと文学の架け橋をつくろうとする古丁の考え方も繋がる。駱駝は書籍を背負って、満洲国民の読書生活を改善し、民度を高めようとしていた。

株式会社芸文書房は合資と言われているが、その資金は同志や仲間、また、彼らの事業に共感する人びとから集めたものであった。日本人文化人の中で出資した人も少なくない。

この夏満洲へ出掛けた田畑修一郎に逢つたら、古丁氏は去年満洲國政府の事務官を罷めて仲間と合資で芸文書房といふ満文の出版の書肆を始めたが、（これは僕も知つてゐた）、そ

の時、何気なく一萬圓出資したといふ話を向うで聞いて来て感心してゐた。⁷⁵

出版社兼書店の芸文書房はこのようにして設立されたが、社長古丁の出版に賭ける野心は果たしてどこまで実現されたのだろうか。

四一年三月、弘報処から「藝文指導要綱」が發布され、「わが満洲国の藝文は八紘一字の精神の美的顕現なり」という方針が打ち出された。八月には各種団体を二元的に改組し、満洲芸文聯盟が結成された。戦時統制である。

一二月、見通しの立たない対中国戦争を打開するため、日本は対米英戦争を開始した。建国一〇周年にあたる翌年には、「満洲国」は第二期建設（第二次建国とも言われる）に入り、「満洲国産業開発第二次五カ年計画」を実施し始める。この年、関東軍や協和会などの建国組は、「大東亜戦争」への準備を「満洲国」建国からとし、「民族協和」を掲げる「満洲国」は「大東亜共栄圏」のお手本だ、と盛んに喧伝した。「満洲国」は、ソ連を睨んだ日本帝国主义の産業基地から対米英戦争の兵站基地へと位置づけを変えられ、農村の増産体制に拍車がかかった。「満人」の力をてこにするために、「民族協和」は必要なスローガンだったのである。

二. 解半知「第一建國から第二建國へ」

第二期建設における「満洲国」の任務について、「満洲国」協和会の一人、山口重次は「協和運動の大東亜戦争対策」として、(一)北邊鎮護の完成、(二)戦時生産力の増強、(三)民族協和の徹底(思想中核)という三点を挙げている⁷⁰。これは、「満洲国」協和会の意見を代表していると思われる。

満洲芸文聯盟機関誌『藝文』の一九四二年三月号は、「建國一〇周年特大号・民族表情グラフィヤ特輯」として刊行された。巻頭言に「新世界史に於ける満洲建國の意義」を掲げ、岡野鑑記「大東亜戦争と満洲國の役割」などの文章に並んで、ややユーモラスな口調で書かれた解半知の「第一建國から第二建國へ」が掲載されている。

二-1 解半知とは誰か

解半知の文章は、本特輯の中でも異色の輝きを放っている。最初に目を引くのは、その風変わりな言葉遣いである。文章全体は日本語で書かれているが、日本人になじみの薄い漢語の熟語や俗語が数多く混じっていて、日本語のルビが振られている。

例えば、「ワレワレミンナ 我們大家、シドウシヤ 汽車、スシシチカツタ 絲毫沒有、ハヤハナシガ 簡直說、ウマクオオサマツタ 收拾得法、シカラバ 如果這樣講、トシデモナイドエライ 天大不得了、ガンバレバ 堅持到底、サイゴノ 終久的(勝利)、バラバラ 挨不着

チヨウケルシ 一筆鉤帳、ケララフクケグチ 滿肚子不滿足、ハラワツチスナキニモシイワケラズシオモフ 打開窗戶說亮話不得了嗎」⁷¹など、枚挙にいとまがない。漢語にこれだけ適切な日本語訳が付いているところをみると、著者は日本語も漢語も上手く操る人物だと推定される。では、解半知とはいったい誰の筆名なのだろうか。

「満系」と名乗っている解半知は、四一年二月八日の対米英戦争の開始による「満系」の心理およびその変化、「大東亜戦争」という言葉に対する理解、第二次建國時期に「満系」の取るべき態度や行動などについて、日系と違う角度で論じている。論理は緻密で、文章の随所にユーモラスな言い回しが見られる。例えば、「日滿議定書も簽訂され、民衆大會は幾度か開かれ、高脚踊りは何遍も踊られ人民の生活も市面商況も皆恢復した後であつた」という具合である。

「満洲国」の漢語大衆雑誌『麒麟』一九四二年二月号に、「解半知先生一夕談話記」という見出しで、太平洋戦況などに関する解半知へのインタビュー記事が掲載されている。聞き手は満洲雑誌社の編集部長を務めていた劉疑遲である。この記事から得られる、解半知についての情報は以下の通りである。①解半知という筆名は、熟語「一知半解」から採ったもの。ラジオで「時事速評」という番組を担当していた時に聴衆に覚えてもらうために付けたのが始まりで、いわゆるラジオネームであった。②しばらくの間は作品を発表せずにいた、民間人の文学者。③太平洋での戦

況をよく知っていて、長期戦を予測していた。

「満系」の民間人で文学者、漢語・日本語の上級翻訳者、ユーモラスな文体、四二年二月までしばらく作品を出さなかった、このような条件を満たす「満人」作家は、古丁しかない。夏目漱石『こゝろ』を含めた多数の日本語作品の翻訳（詳細は第二部で論じる）、日本語エッセイの創作、ユーモラスな文体（例えば「原野」など。第三部で論じる）、芸文書房の社長で民間人、四〇年一〇月の健康隔離以降、作品の発表がない（四二年六月によくやく「竹林」を発表）。また、古丁の日本語エッセイの中には、ルビの形ではないが、中国語会話文に日本語訳が付いた、以下のような文章が見られる。

—— 嗶玩意兒、還趕不上明星的呢（なーんだ、明星プロの出品にも及ばぬ。）と或る學生服が云つた。

—— 一點兒用意也沒有、他媽的、花錢看這玩意兒真怨（何の意味もない、クソ、金を出してこんなものを見るのは真平だ）と——ある協和服が云つた。

—— 上海的片子、怎麼不好也不能像這樣（上海の映畫ならどんな悪いものでもこれ程悪くないわ）——と或る旗袍が云つた。⁷⁸

二二二「第一建國から第二建國へ」に見られる見解

「第一建國から第二建國へ」の冒頭には、「建國一〇年、大東亞戦争に際して、其の回顧、自省奮起を促し」たという一篇の放送稿が付され、「多少の共鳴を呼び」「今度は日系同胞に、其の内容を傳へようと思ふのは」「實に其の多少の共鳴が少しでも實踐として顯はれて来た時は、之を受容し助長して欲しいと願ふ故である」と、この記事を書くきっかけと目的が述べられている。建國一〇周年と、大東亞戦争勃発以来の最初の新年という二つの大きな題目を捉えて、「腹を割つて語つて見たい」という作者の気持ちが現れている⁷⁹。「満洲国」建國一〇周年を祝う理由の一つは、「一〇年だ、祝はう」だ、と言う。十年経たないうちに必ず「そっくりそのまま頂戴する」と予言していた古丁には、まさに予想外のことであったであろう。

次に、リットン調査団の報告書に「満洲国」は絶対長持ちしないと断定されていたが、三七年七月七日の「支那事変」、四一年一月八日の対米英戦争などの大事件が起こっても、「満洲国」では民心の動揺も市場の混乱もなく、訓練を乗り越え、内政外交各方面で成績を上げてきた、と述べている。また、「満系」は、日本には米英を敵にまわすキモがないと思っていたが、真珠湾攻撃をはじめ、マライ沖や香港占領などの戦績を見て日本の力強さに驚いたとも書いている⁸⁰。

そして、米英の反攻を予想した上で、戦争はすぐには終わらないため、長期戦の準備をしなければならぬと呼びかける。その理由として、世界を制覇しようとする米英の野心は死なず、必ず潜水艦や飛行機を使って邪魔しに来ること、日本が占領した東南アジアの原住民の教育や感化の難しさ、また、大東亜共栄圏の資源開発や産業開発に時間がかかること、などを挙げている。

「第一建國から第二建國へ」ではまた、次のようにも述べている。盧溝橋事件後、河北省・山東省に故郷を持つ多くの満系は、日本の宣伝に不信感を持ち、日本は本当に米英を敵にする気があるのか、という疑いを持った。日本がすぐに負けて、「堅持到底、終久的勝利は我們のものだ」と言える日を密かに願う人が多かった。しかし、

我們は十二月八日に至つて始めて太陽を仰ぎ見る心地がし、東亞は此の日を境として別な東亞となり我們は以前支那事變を天大不得了トアマヘナイトシライことの様に思つたが、原來ソノカもつとドエライことがあつたのかに氣付き、我們東亞就看キョウケンることを知つた。一二月八日以前の四年半の同族相食の慘劇は茲で全く一筆鉤帳ケツシにされた様な氣がするのである。此の無意識の心理こそ大東亞戦争が一二月八日に始まつた様に思はせるのである。此の心理は字句から云へば錯誤の様であるが、人情にも情理

にも合つてゐる。⁸¹

日本側は、「大東亜戦争」は三七年七月に開始されたと宣伝し始め、日中戦争を合理化しようとした。それに対して、解半知は、「満系」の「同族相食」の日中戦争に対する気持ちと、対米英戦争に対する思いの違いを述べ、「大東亜戦争」は一二月八日に始まつたという認識が人情にも情理にも合っていると主張する。言い換えれば、「支那事変」から「大東亜戦争」が始まつたという日本側の言い方は、「満系」にとつては「人情にも情理にも合っていない」ということになるだろう。

実は、日本がシンガポールを陥落させた四二年二月一五日の夜、古丁は林房雄と、新京の最高級レストラン「香蘭」で対談した。その記事は、満洲芸文聯盟機関誌「藝文」四月号に掲載されている。記事の内容は、「大東亜戦争の構想」「満洲文化の転換期」「漢民族を認識せよ」「郁々たる日本文化」「硬派文学への提唱」「語系と民族の問題」「一流の愛国者たれ」という小見出しに分かれている。

林房雄の発言は、「満洲事変の時に既に日本側の指導者には大東亜戦争の構想があつたんですね」と、時局に対する流行りの「新発見」から、「満洲の魯迅になれよ」⁸²という古丁個人に対する激励にまで及んだ。この対談では、太平洋戦争における日本の連戦

連勝に興奮する林房雄と、林の矢継ぎ早の質問に慎重に言葉を選びながら答える古丁の態度が対照的である。例えば、林は、

「事（満洲建国——引用者注）に携わった中心人物は欧米勢力、特にその最後のな力としての米国の打倒によるアジアの解放を目標とし、米国と闘う準備の下に満洲建國に臨むと云う事をはつきり言つてあるのですよ。現在では大東亞戦争も幸いに勃発した。これは満洲建國の最初の理想であり最後の結論でもあります」

と見解を述べてから、次のように質問する。

「これは是非（満人に）しらせなければならぬですよ。最初から知つて居つたらどうだつたらう」

それに対して古丁は、

「知つて居つたら今迄の満系官吏は、今迄以上に働ける様になるのではないかと思ひます。目的がはつきり示されて、それに向かつてはつきりした目標がある訳ですからね。」⁸³

と答えている。この古丁の発言により、最初はその目的がはつきりしていなかったと読める。対談自体は、日本人作家が一方的に質問し、「満人」作家がひたすら答える、という日満作家交流の通例のパターンで行われているが、この問答の部分に、「満洲国」建國に対する日本人作家と「満人」作家の認識の違いがはつきり出ている。

ところで、『藝文』一九四二年三月号には、関東軍関係者による「建國を語る」座談が掲載されている。満洲事変と満洲国建國を「大東亞戦争」の準備と位置づけ、自分たちの路線の正しさを確認し合う内容となっている。林房雄の意見はおそらくそこから借りてきたものと思われる。鈴木貞美はこの言い方を取り上げ、

対米英開戦こそが、日中戦争が泥沼化してしまったこと、関東軍がソ連との戦闘に敗北したことなどなど、大陸侵略について多くの日本人が抱いてきたモヤモヤした気分を払拭し、日本が最初から正しい道を歩んできたことを証明するかのような役割を果たしたのであり、関東軍や「満洲国」建國事業を担ってきた人びとにとっては、自分たちの努力がようやく報われたという気分させるものだったのである。⁸⁴

と指摘しているが、解半知（古丁）は、このような日系の論理の

自己欺瞞を鋭く突いていたのである。さらに、解半知は、「満洲国」での民族協和の実態を指摘し、以後の民族協和のために満系の取るべき姿勢を論じている。

大東亜戦争は長期化を免れず、「我々の患難は長久に互り、我々國內各系民族が患難を共にする時期も亦甚だ長いかも知れぬ」⁸⁵。したがって、民族協和の理想を実現するために、各民族の同心合力が必要となる。しかし、

同心は本来容易ではない。同心でなければ合力は更に難い。(略)我々は建國以來一〇年、色々の試練を経たが始終共同敵人に逢着せず患難を共にする機會を有たなかつたため、我々各民族は未だ眞々に協和しなかつたのだ。彼此は眞々に信頼せず、疑つた。他は他を疑つて靠不住となし機密事項について商量し一緒に工作しないし、他は又他を疑つて不存好意、侵占にきたとなし、斯くては彼此懷疑し、彼此躲避つて他は他が一切を壟斷跋扈して大家に参加工作を許さぬとし、他は又何を什麼も幹ない、什麼も不會幹と見て客氣して同幹しようと、拉もしない。⁸⁶

要するに、日系と満系は、協和どころか、疑つて警戒し合うばかりで、本当の信頼関係がなかつた。それで、「大體に於いて満系

國民で辦事をすべき人々は辦事せず、辦事をした人々は辦事をする意識を有たない勞工であつた」という結果になつてしまつたと言ふ。それがこれまでの「民族協和」の実態である。このような結果を招いたのは、お互いの罪であり、まず自己反省しようと呼びかけ、「満系」の反省は以下のように行わなければならないと述べている。

我々は私下幾人かで聚談するときは、人家は如何した、怎麼したと満肚子不滿不足をならべながら、眞正に事實を陳べ、意見を述べる時になれば、冠冕堂皇虧心話を言つて、何でも好好！何にもそうしなくともよいではないか？ 打開窓戶説亮話不得了嗎？人家面前で亮話を云はない、又は云ひたくない人は、背後で牢騷を發べる資格はない人だ。⁸⁷

「我々満系」は陰で愚痴をこぼすが、日本人の前では本当の意見が言えずに従うのみ。その言いわけとして、日本人が自分の主張を聴いてくれない、と言ふ。しかし、「人家は聴かないと云ふ前に、主張する熱意のない傍觀的な不協力態度を反省」する。「今次の大東亜戦争は民族協和を達成し第二建國を成就する絶好の機會であり、且唯一の機會である」。「怎麼樣、我々は『打開窓戶説亮話』を以て一〇周年慶祝、第二建國の口號としたら好不好？」と

呼びかけて、文章は終っている。

解半知は、第二建国を、同心合力で真の民族協和を実現させる絶好のチャンスと捉え、「満系」はこれまでの癖を反省し、自分の意見をきちんと述べて、日本人との仕事に参与すべきと主張した。つまり、「満洲国」は予想通りにすぐには崩壊しないし、「大東亜戦争」では日系に対し満系の協力は欠かせない。これを機に、満系の発言権と参政権を獲得しようとしたのだ。この文章は、日系人に「受容し支援して欲しい」と要請する目的で日本語雑誌に発表されている。そこには、日系もまた自ら反省して欲しい、という願いが込められているはずだ。建前ではなく、本来の意味での民族協和を呼びかけている。

この時、古丁は初めて「民族協和」を謳うようになった⁸⁸。そして、真に対等な関係の実現を提唱していたということを、ここではつきりさせておきたい。侵略者の言う「民族協和」のスローガンを利用して、そう言うなら「その通りにやれ」と正面から挑んでいるのである。いわば敵の懐に飛び込んで、痛いところを突くやり方である。これは、表面でのみ相手に従うという意味での「面従腹背」の部類には入らないであろう。

三 再び漢語保持の主張

四一年一〇月に、注音符号が禁止され、四四年に文教部から「満語カナ」が公布された。「満語カナ」とは、漢語の発音を表示する日本語式カナ（ただし、本来の発音に近づけるため、ほぼ第二次大戦時の新字新カナに近いもの）である。例えば、「満洲帝国」(man zhou di guo) はマヌ デオウ デイー グラ（その上に四声を示す印がつく）とされている⁸⁹。

廃止から禁止を経て、注音符号はすっかり「満洲国」から姿を消した。しかし、「民族協和」が強調され、意見が言えるような状況になると、古丁は、これに関しても執拗に食いついていく。

『藝文志』第五期（一九四四年二月）「翻訳特集」の「思無邪」欄に、古丁は「注音の問題」（注音的問題）という短文を発表し、「もとより、『注音符号』も漢字に置き換えられる可能性はあるが、それより、その表音における役割が大きい」⁹⁰と、「注音符号」の優秀性を強調している。

近來、「カナ」で漢字の音を表すことについては調査されてきたが、注音符号の欠点については何も指摘されていない。これは明らかに「拼音」から「読若法」へ歴史的に逆戻りしている。（略）

大東亜宣言により各民族の伝統を尊重すると声明している
ので、漢字は廃止できない。そうであれば、五万個の漢字の
発音を表すためにたった四十個の注音符号を思いっきり援用
して、何の不都合があるだろう。おまけに、この四十個の注
音符号は日本のカナに学んで作られたものである。⁹¹

四三年一月六日に、東京で大東亜会議が開催された。「満洲
国」の王精衛政権などが出席した同会議で採択された『大東亜宣
言』には、「一 大東亜各國ハ相互ニ其ノ傳統ヲ尊重シ、各々民族
ノ創造性ヲ伸暢シ、大東亞ノ文化ヲ昂揚ス」という文句が盛り込
まれている。

日本の文化人の多くも、「各民族の伝統を尊重する」ことに同意
していた。四三年八月の第二回大東亜文学者大会では、横光利一
が「各民族の伝統を尊重しよう」と挨拶した。また、前述した
「小林秀雄を囲む」座談会の中でも、「満洲の文学はどうなるか」
という質問に対し、小林は、「とにかく満洲の民族を非常に愛す
る、同情するということさえ作家にあれば、その中からきつと何
かが出来てくる」⁹²と答えている。小林秀雄らは「各民族の伝統を
尊重する」ことを理想としたからこそ、「大東亜共栄圏」に協力し
たと考えられる。同様に、古丁がそれをもって「注音符号」を守
るべき理由にしたことは、「満洲国」の政策批判にもなったであろ

う。このように、古丁が注音符号を支持する理由は、時期や政策
に応じて変わった。

四三年八月に発布された「協和会運動基本綱領」には、日系の
課題として「満語」の習得が掲げられている。「民族協和」の建前
を建国組が強調する以上、そして、これも建前に過ぎないかもし
れないが、言語政策にも一定の変化が出てきたのである。それを
背景に、大内隆雄のエッセイ集『文藝談叢』が「駱駝文芸叢書」
の一冊として芸文書房（一九四四）から出版された。そして、古
丁は四四年三月、聯盟『藝文志』第五期に「漢文で書く」（用漢文
寫、丁名義）という短文を寄せ、大内隆雄の地道な翻訳活動を評
価しつつ、

日本人は漢文で書く歴史が長いが、漢文の白話体で書かれ
たものは、私の寡聞に限り多く見られない。大内氏のこの文
集は一つの始まりとなるかもしれない。⁹³

と、日本人に真の漢語習得を期待している。そして、「文人の魂
と魂の交流は、まず筆と筆の交流だ。相手の言語で書くことは、
相手の言語を翻訳することと同じく有意義だ」⁹⁴と述べ、日本人知
識人との魂の交流を望み、翻訳と相手国の言語で書くことの重要
性を強調している。ここにも古丁の、建前にとどまらない、平等

に基づく真の「民族協和」を願う気持ちが現れている。

もう一つ、言語政策に関係して言えば、古丁は早くから翻訳の必要性を訴えている。また、機会に應じ、国立編訳館の設立も呼びかけていた。三九年一二月発行の『芸芸春秋』第一七卷第二四号に「満洲文学雑誌」を寄稿し、その中で、「私は満洲の現段階に於ける文学を限定版文学と称したい」と述べている。そして、限定版を普及版にするために、「文学に限らず、文化全般に互って斯る大出版をやるうと意気込んでいることは全く喜ばしい。しかし、これは単に民間営利事業とせず、国家的事業として、編訳館の如きものを置いて、之に当らせるのが一番望ましい」と、満洲文学発展のため、国家事業として編訳館設立の希望を表明している。また、前にも触れた「満洲文学通信」の中でも、「仏典の翻訳が曾て支那文学に寄与したように、翻訳文学も満洲文学に寄与し得るであろう。(略)機会がある毎に満洲国に於て国立編訳館の如きものを置いて、一大国家的事業として日本其他外国の文化を紹介する事に就て愚見を述べて居ったが、そのこともこういう意味で言ったのであろう」⁹⁵と述べ、満洲文学のための編訳館設立を重ねて呼びかけている。

ただし、四一年三月に「芸文指導要綱」が公布されてから、古丁の翻訳についての訴え方は少し変わってくる。同年一〇月に刊行された芸文志事務会編の翻訳短編小説集『訳叢』には、日本を

はじめ、フランス・ロシア・イギリス等の国々の作品が収録されている。目次と本文の間に、「此の国土に移植されたる日本文芸を經とし、原住諸民族固有の芸文を緯とし、世界芸文の粹を取り入れ織り成したる渾然独自の芸文たるべきものとす——『芸文指導要綱』⁹⁶と、「芸文指導要綱」の一文を引用し、特に「取世界藝文之粹」を太字で強調している。古丁らは、翻訳がいかに「芸文指導要綱」に沿ったものを主張しているのである。『譯叢』の「序」には、「翻訳研究会」⁹⁷の中心人物の一人、大内隆雄が、「世界芸文の精華を紹介することが我々の芸文創造に欠かせない重大な任務である。これについては、先日発表された『芸文指導要綱』にも明示された」⁹⁸と記している。

古丁はまた、日本の文化人と会談する際にも翻訳について強調していた。「林房雄・古丁対談」の中に、次のようなやり取りが見られる。

林…小説に関しては、自分たちがほしいと思う高い水準に達しなければ、国産品たりともこれを否定すると云う
 覚悟が必要です。日本文学でも、ロシア文学でも、

英文学でもよい、今満洲国の文学に対して必要な、或は満洲に居る文化人がこれをよいと思ったものを翻訳紹介するだけでもよいのです。それをやらなければだ

めである。

古丁…同感です。僕は機会ある毎に言っているのです。国立編訳館と云うものを作って大量的に日本を始め、世界各国の文学を紹介するのだね。⁹⁹

第二回大東亜文学者大会の分科会で、古丁は、「国家的常置機関たるべき『大東亜編訳館』を大東亜中心たる東京に設置され、その分館を新京、南京、北京に設置し大東亜文学ないし文化の伝○¹⁰⁰たらしめんことが望ましいのであります。これを可及的速かに実現せられんことを切望して止まない次第であります」¹⁰¹と、「大東亜」文学ないし文化交流のために、編訳館の設立を提言している。この提言は採択され、大東亜編訳館の創設（翻訳委員会の設置）が、第二回大東亜文学者大会の議決事項として承認された¹⁰²。そして、実際に北京市内に国立編訳館が建設され、『国立華北編訳館館刊』（一九四二年一〇月創刊）という雑誌まで出版された。ところが、「満洲国」では、満洲芸文聯盟の中に翻訳部門（責任者は杉村勇造）が設置されたのみで、「国立編訳館」なるものは建設されなかった。

四四年九月号の『新満洲』（満洲図書株式会社）に、「満洲編訳館的創立」（満洲編訳館の創立）という特輯が組まれている。大内隆雄は、「關於満洲編訳館之創立」（満洲編訳館の創立について）

の中で、「我々は現段階の満洲国では、民間団体の編訳館の創設が求められていると主張し、今簡素な機構として満洲編訳館を創設した」と述べている。なぜ彼らの主張が「国立」から「民間団体」に変わってしまったのか、その理由ははっきりわからないが、政府とのやり取りがうまく行かなかったからと思われる。その他、弘報処の厳しい統制のためとも、敗戦に追い込まれていた時期で予算がつかなかったためとも考えられる。

このように、古丁は、翻訳と国立編訳館について一貫して主張していて、その理由は、「満人」文学の質の向上、「取世界藝文之粹」（芸文指導要綱）、そして「民族協和」のため、と次第に変わっていく。解半知は、「自信があり理由がたつものなら、何故主張せぬのか？人家は聴かないと云ふ前に、主張する熱意のない傍観的な不協力態度を反省」¹⁰³しようと、「満人」に意見の提出を呼びかけるとともに、自身も注音符号や国立編訳館についてはっきり主張し、その通りに実行した。結局、現実には何の変化もたらさなかったが、その声の存在が必要だったのである。これも、「面従腹背」とは程遠い。漢語と漢語文化を守ろうとする姿勢は、古丁の「大中国」思想の現れと見てよいであろう。

四、「思無邪」から見た戦時下の思想

四三年一月、汪精衛南京国民政府が対米英宣戦を布告。同年一月には大東亜会議が東京で開催され、各民族の伝統を尊重するとした『大東亜宣言』が発表された。

「満洲国」では同年三月に「協和会運動基本要綱」を発表し、「勤労増産」のために、農業・鉱業・漁業各生産部門にある程度の優遇策を実施するなど、「満人」の主体性を重視するようになる。新聞などのメディアも、農民や労働者など生産の第一線で活躍している人々を持ち上げて宣伝した。一方、この政策はあくまでも「聖戦」完遂のために実施されたもので、当然、生産部門に対する収奪は激しくなった。

戦時下の芸文家には二つの使命が課せられた。一つは、「聖戦」協力、すなわち国民の戦時生活に潤いを与え、戦意を高揚させること。もう一つは、新しい東亜文芸の創造、すなわち米英頽廃文化を駆逐し、東亜復興を象徴し、肇国精神を顕現する芸文の創造である¹⁰⁴。具体的には、文学創作に「民族協和」「勤労増産」「鬼畜米英」のモチーフが求められた。

四三年一月に満洲芸文聯盟の「満語」機関誌（聯盟『藝文志』）が芸文書房より創刊され、「聖戦」完遂のための文芸活動が開始された。古丁は三度にわたって大東亜文学者大会に参加し、

四三年一月には満洲芸文家協会大東亜連絡部部長となる。この時期、大川周明『米英東亜侵略史』、吉川英治「宮本武蔵」、高村光太郎の詩などを翻訳した。そして、四四年以降は、健康隔離生活を描いた「新生」、農村見聞の「下郷」、寓話的な小説「山海外経」等、それぞれに「民族協和」「勤労増産（集団出荷）」「鬼畜米英」をモチーフとした作品を発表していく。

聯盟『藝文志』の第四期からは、「思無邪」という雑文（エッセイ）コラムが加わった。「思無邪」は、そのタイトルが示す通り、作者の思いを率直に語るコラムで、一篇から数篇のエッセイで構成されている。内容は、時局に対する評論、文学者への呼びかけ、また、文学作品の質の高揚、読書習慣のすすめ、出版や教育問題などであった。思想性に富み、署名がいろいろと変わったこれらのエッセイのほとんどは、古丁の手によるものと思われる。

本誌のほぼ毎号に中心的なテーマが設定され、「思無邪」はたいしてそのテーマに沿って書かれている。例えば、翻訳をテーマとした第五期の「思無邪」には、「注音的問題」（注音の問題）や「用漢文写」（漢文で書く）など、言語関係の文章が並ぶ。戦争必勝詩の特集を組んだ第七期の「思無邪」は、「奏凱歌而後已」（凱歌を奏でずにやまない）、「待望素人詩人」（素人詩人を待望する）など、戦争や詩に関する内容であった。その他、第九期は「西南紀行」特集に合わせた「西南地区文芸宣伝隊」であり、第一

〇期は第三次大東亜文学者大会の直後に発行されたため、「思無邪」も「第三次大東亜文学者大会」に関する内容であった。

四一 時局や国策の宣伝

では、「思無邪」コラムはどのように時局や国策を宣伝していたのだろうか。まず、第七期の「奏凱歌而後已」（凱歌を奏でずにやまない）と「大感動」を紹介する。

大東亜の局面がますます苛烈化してきた。この大局面の中で、詩人は戦列に加わり、詩でも大激闘を歌う。（略）日本がなければ満洲国もない、中国もない。我々大東亜の運命は、歴史上も地理上も同じように「生死存亡、断弗分携」という大関係にあるのだ。この大きな関係は必ず永遠に維持されなければならぬ。¹⁰⁵

一つの大感動が我々の心身を貫いた。それは大東亜戦争の必勝だ。今日にあたって、これ以上に大きな感動はない。この大感動の中から、我々の大詩篇は必ずや生まれてくる。（略）我々の満洲国を愛する、我々の親邦日本を愛する、我々のすべての盟邦を愛する、我々の大東亜を愛する。我々の満洲国を守る、我々の親邦日本を守る、我々のすべての盟邦を

守る、我々の大東亜を守る。¹⁰⁶

この文章が、「聖戦」を呼びかけていることは疑いもないが、文章の一部は新聞などからの引用と思われる、スローガンの羅列のようにしか見えない。実質的なことは何も言っていない。特に、「大局面」「大激闘」「大関係」「大感動」「大詩篇」など、「大」の字が付く言葉が多用されているため、文章の調子がヒステリックな絶叫のように聞こえ、滑稽にさえ感じられる。ここには、三七年九月二日の『盛京時報』に総務庁属官徐長吉の名で発表された、「日本対華的真意」（日本対華の真意）と同じ手法が用いられている。ただし、「思無邪」はこのような口調の文章ばかりではない。

四一 民衆の文化生活への関心

第四期の「思無邪」では、①「読書の生活化」（読書の生活化）②「生産文學衍義」③「児童読み物について」（關於児童讀物）④「上海書」⑤「中心文体的探求」（中心文體的探求）の五つの問題について議論している。テーマから見てもわかる通り、②と⑤は文学に関わるもので、他の三つは読書、教育、出版に関するものである。

①については、冒頭で以下のように述べられている。

ある民族に向上心があるかどうかは、彼らの生活が健全で、豊かであるかどうかによってわかる。我々の生活はあまりに病的で、あまりに貧困であることを認めなければならぬ。¹⁰⁷

日本人は読書で彼らの生活を豊かにしている。いや、読書が、実は彼らの生活の一部となっている、それは、麻雀が我々の生活の一部となっているのと同じだ。¹⁰⁸

東亜の先覚日本人から学ばなければならないものは非常に多いが、その中で、読書という美風の薫陶も我々が教わるべき科目の一つである。(略)我々は読書を娯楽化し、面白いものや読みたいもの、何でもいいからとりあえず選んで、ゆっくり読んでいく。そうするうちに、我々の生活習慣は自ずから次第に変わっていく、我々も思索的人類となる。「我思う、ゆえに我あり」¹⁰⁹

これらの文章は短いわりに扱っている問題は大きい。読者生活習慣に注目し、麻雀の代わりに読書を娯楽にしようと呼びかけている。その目的は、思索的な人間、向上心のある民族になることにある。これはいかにも、健康隔離の体験により民度の低さを痛感し、文化人として幅広い分野で啓蒙しなければならないという

責務を覚えた、古丁らしい考え方だ。この呼びかけ自体が、彼の啓蒙義務を果たしていた証拠となる。問題は、戦時中に彼の話に耳を傾けてくれた人がどれくらいいたかということだ。

③児童の読み物については、次のように述べている。

ある国の文化度の深さを測ろうとすれば、最も直接的な方法は、その国の教育を観察することだ。(略)初等教育はその国の教育の基礎的段階であり、(略)中等、高等教育段階よりさらに重要である。¹¹⁰

最初に基礎教育の大切さを強調し、日本では各学年にわたって、雑誌や単行本などの児童読み物が多いと指摘する。しかし、その一方、

(我々には)学校によって編集印刷された定期読み物がないばかりか、総合的な児童雑誌さえない。¹¹¹

したがって、次のように提案する。

児童読み物の問題は、何らかの方法で根本から解決するべきだ。年内に何種類かの刊行物を出すように、帝国教育会が

この責務を担うべきだ。¹¹²

民衆の読書生活の養成は、児童教育から行われなければならない。子ども時代から読書の習慣を身につければ、大人になっても自然に本を読む。日本では児童読み物が多いが、満洲でも児童読み物の出版を活発化させなければならない、と問題解決を行政側呼びかけている。

④については、上海で出版された書籍はそれほど質が高くなくとも満洲では人気がある、という現状が紹介されている。そして、このような状況を変えるには、満洲の出版物のレベルを高めるしかない。これは印刷技術が低い個々の出版社にはできないこととで、政府が統一的にやらなければならない、と言う。

もし全国の出版業が一元あるいは数元に統合されれば、我々のより満足できる本をいくらか出版することはさほど難しくないだろう。この企てが一日も早く実現することを願う。¹¹³

古丁の出版に関する理想はすでに『明明』時代から語られていたが、以来幾度となく挫折している。それまでは月刊満洲社や満日文化協会の資金援助を受けていたため、受身的で不自由な立場

にあったのかもしれない。だからといって、芸文書房の社長をしている現在でも、その計画を思うままに実現することはできない。その理由には、各出版社の印刷技術の低下もあるが、それよりも政府の規制、すなわち日本人を中心に物事を運ぶやり方があったと考えられる。民度の向上と民族の向上心の高揚、思想的な人間の養成、これらの課題が書籍の出版につながったわけだが、政府の支援がなければ一出版業者に過ぎない古丁にはなす術がなかったであろう。古丁はその現実を認識した上で、聯盟『藝文志』を通し、「東亜の先覚」たる日本と比較して「満系」の立ち遅れを説明し、その解決を政府に求めているのである。これは、解半知の言う「打開ハライワケ窓戸マドノ説亮話セリョウワ」であり、建国精神の「民族協和」に基づいた意見でもあった。

四一三 「青年的責任」（青年の責任）

聯盟『藝文志』第八期（一九四四年六月）の「思無邪」に、古丁の「青年的責任」（青年の責任）という文章があり、「康德文化」と青年の責任を論じている。まず、対米英戦の中で「満洲国」を興亜の先駆と位置づけ、西洋の「霸道青年」に対する「満洲国」の青年を、「道義青年」と名づけている。そして、以前の青年はすることもなく、石川啄木の歌のように「手を見つめて」（凝視着手）いるだけだったが、今の道義青年は新興文化を創造する

ために「手を揮っている」（揮動着手）、と言う。その新興文化とは、「康徳文化」と呼ばれた。

「康徳文化」とは何か。

「康徳文化」の精神は、すなわち惟神之道を源にした建国精神だ。わが東方精神文明にはもちろん儒、仏、老荘などがあるが、これらの精神を融合し超越して、その上にあるのが惟神之道だ。わが満洲国の国本は惟神之道に基づいている。これは確かに我々の国民の幸福だ。（略）我々の道義青年は、惟神之道を篤く信奉しているからこそ、康徳文化の任務を果たすことができるのだ。¹¹⁴

ここで古丁は、「惟神之道」を東洋精神の帰着点とし、「康徳文化」の精神と見ている。日本の戦時思想の「惟神之道」は「満洲国」に持ち込まれ、「民族協和」をしいで肇国精神となっていた。古丁によれば、「康徳文化」には二つの特徴がある。一つは、国家生活の完成である。総力戦の中ではあらゆる人びとが戦士となっている。個人を無くし、国家を重んじて国家生活を完成することが謳われていた。古丁はまず、それをなぞる。

以前の青年はただ個人を知っていて、国を知らなかった。（略）我々道義的青年は、増産、勤労、防衛、貯蓄を通し、国家と一体となって、それぞれ高度な防衛国家生活を送っている。¹¹⁵

そして、次のように言う。

固く動じない建国精神を持ち、それに基づいて技術の錬磨をする。例えば、吉林豊満水電ダムは我が満洲国の美しい象徴となっている。その中には疑いもなく民族協和的技術の結晶が入っているのだ。あらゆる分野において、（略）民族協和的、すなわち道義的な技術が必要だ。したがって、我々道義的青年は、さらに各自の分野でそれぞれの技術を錬磨しなければならぬ。これは道義的青年の責任というより、むしろ道義的青年の権利だ。（略）技術錬磨において、親邦日本はわが道義的青年の良き師となっている。（略）我が道義的青年は、虚心に勉強さえすれば、技術の頂点に達することができる。技術錬磨の目的は、人間がどのように物を駆使するか、いかに道義のために物を駆使するかを学ぶことにある。西洋の技術では、人間が物に弄ばれている、すなわち、人間が物の奴隷となっている。¹¹⁶

技術とは一般的な技術のことではなく、民族協和的・道義的な技術だ。道義的青年の技術の錬磨とは、人間が物を駆使すること、鬼畜米英のように人間が物の奴隷になることではない、と古丁は指摘する。

一方、戦時中の満洲文学については、大内隆雄が、「時局色を帯びた作品がないわけではないが、数は少なく、ほとんどが些細な新観念を機械的に無理やり加えたに過ぎない」「素材を入れ替えるだけでは、現代文学の転換の実現はあり得ない」「要するに思想の錬成と新しい世界観の把握だ」¹¹⁷と論じている。「思想の錬成」の内容については、東条英機首相の日本文学報国会結成式での発言を引用し説明している。つまり、「日本精神」の浸透と世界新秩序建設への邁進である。大内隆雄は「満人」文学者の良き理解者であったが、この時期になると、「満人」文学者に対し、日本人文学者と同じような要求をするようになってくる。大内も苦しい立場に立たせられていたのかもしれない。

しかし、古丁はそうは言っていない。康德文化の基底に「惟神之道」があるなら、思想の錬成を通してそれを建設すると言ってもおかしくないが、古丁はあえて、技術の錬磨を通して康德文化を建設すると言っているように思われる。技術は民族協和の技術で、それを錬磨するのは青年の責任と権利だと主張していることから見れば、明らかに青年たちに技術の獲得を促していたと考え

られる。

時は一九四四年で、日本の敗戦は目に見えていた。日本が引き上げた後、豊満ダムをはじめ、近代化した工業施設の運営と管理は、満洲の青年に委ねられることになる。しかし、従来の満洲青年は、「満洲国」に抑圧されて苦悶する中、毎日「手を見つめて」いるばかりで、技術の勉強はほとんどしなかった。今後は青年が積極的に行動し、日本人技術者から学び、それぞれ技術を身につけなければならない。青年には勉強する権利があれば、日本人技術者には教える義務があると述べ、文章を次のように結んでいる。

大東亜戦争は、ますます苛烈化してきた。わが道義的青年の銃後の闘いもますます激しくならなければ、最終的に勝ち取ることはできない。喜んで行動し、固く信じて疑わず、ただ頑張って前へ進むのみ。¹¹⁸

この言葉からは、行動しながら「明日」を迎える作者の高揚した気持ちを読み取れる。古丁の言う「康德文化」とは、日本支配から脱日本支配への過渡期の文化だったとも言えるだろう。

以上のように、四三年一月に芸文書房より創刊された満洲芸文聯盟の漢語機関誌『藝文志』は、「思無邪」に登場したエッセイによって、国策の宣伝と「聖戦」に協力する性格へと色を染めて

行った。戦時中の厳しい統制の下、戦争協力から完全に逃れることはできない一方で、古丁が、国民の文化レベルの向上、漢語文化の保護、日本敗戦後の満洲の運営と管理などに関心を払い、努力し続けたことを見逃してはいけなと思われる。

第三章のまとめ

「満洲国」の植民地性と「封建性」と、反満抗日運動への厳しい取締りに直面し、古丁はかなり苦悶していた。彼はその苦悶を昇華して雑誌の編集出版に携わり、翻訳や創作などの文学活動を展開する。作品を見ると、三九年までは「満洲国」に対してほとんど反発の姿勢を取っていたが、四二年頃には、日本は敗れ、「満洲国」は必ず中国に返還されるという信念を固め、それに備える立場から発言するようになっていく。一方、対米英戦争開始後は、長期戦を覚悟し、積極的に「民族協和」のスローガンに賛同し、そのスローガン通りに、注音符号の使用継続や、真の民族協和の実現を政府に要求するようになる。そして、日本の敗戦が明らかになった時点では、間もなく訪れる満洲の新建設に備えるような発言を見せていくのである。

このように各時期ごとに古丁の態度には変化が見られるが、一貫していたものもある。それは、「満洲国」の現実に対する批判

と、文学や出版を通して国民の精神を改造し、民度を高めようとしたことである。これが、本人の評論・随筆や談話、また知人たちの回想が語る、古丁の思想の変遷である。それを、面あって逆らわず、腹の中で反対を唱える、とまとめるなら、対米英戦争期の古丁の態度は「腹背」だったと言えよう。しかし、注音符号のように、はつきりと表立って日本側の政策を批判する面もあった。つまり、「面従腹背」ではまとめ切れないところもあるのだ。

第二部以降、古丁の翻訳、創作、また編集出版活動のそれぞれについて詳しく考察する中で、また別の側面も現れるだろう。

第四章 「満洲国」崩壊後から死去まで

一九四五年八月八日のヤルタ会談の決議に基づき、ソ連軍隊が中国の東北地方に進入し、関東軍は逃走した。一日、昭和天皇が玉音放送で戦争の終結を宣言したが、ソ連軍の東北駐在は続く。そして、ソ連軍の呼びかけと、中国共産党長春支部の積極的な支持と参加により、東北中ソ友好協会が発足した。元「満洲国」の作家の多くが入会し、古丁はその秘書を務めることとなった。この時期、中ソ友好協会の主な業務の一つは、日本に協力した人びとを見つけ出して処罰することであった。

「みすみす殺すとは気の毒だなあ。それよりいつそ北京へでも逃してやるわけに行かないのかね」

これは山田氏が、爵青をかばつての発言だった。

古丁氏はいつもの洒洒落落の態度を崩さず、椅子に背を凭せ、微笑を含んで答えた語調は冷厳そのものであった。

「それは出来ませんね。ほくらは許しても、民衆が許さんだらう」¹¹⁹

以上は、北村謙次郎『北邊慕情記』からの引用である。山田清三郎と古丁の会話に上ったのは、かつて関東軍の通訳を務めたとされる古丁の文学仲間の一人、爵青である。会話には、中ソ友好協会の秘書としての古丁の強い姿勢が感じられ、自分は民衆に許されるという自負もうかがえる。

しかし、その後、中ソ友好協会の内部が分裂して、古丁一派は、まもなくそこから離れることになる。東北地方では中国共産党と国民党が競い、それぞれの力の消長があった。この間の古丁の行動は明らかになっていないが、彼はずっと共産党側について行動していたと思われる。戦後、古丁は本名の徐長吉を徐汲平に改めている。

四六年一二月、中華全国文芸協会東北総分会より雑誌『東北文芸』が創刊され、古丁はその事実上の編集者となった。創刊号の

冒頭には、延安から戻ってきた有名な左翼作家、蕭軍の「目前東北文芸我見」（わたしの目から見た今の東北文芸）が掲載されている。古丁も史從民という筆名で、「第一批貨」（初回の貨物）を発表した。この雑誌によって、当時延安から帰った作家と、元「満洲国」の作家が一緒に活動していたことがわかる。そして、四八年、古丁は哈爾濱東北文芸協会所属哈爾濱評劇院管理委員会の主任となり、文芸界から戯曲界に転身する。翌年には瀋陽唐山評劇院院長、五〇年には東北戯曲新報社秘書兼編集も務めた。この間、古丁は演劇（評劇）の脚本の編集に励み、『王貴与李香香』（王貴与李香香、一九五〇）などの優れた脚本を数多く出版している。また、『習曲筆記』（一九五二）を著す一方、翻訳活動も続いていた。五四年に中央電影局東北電影製片廠から楠田清の映画台本『箱根風雲録』が、七九年には上海訳文出版社から葉山嘉樹『海に生くる人々』の翻訳が、それぞれ出版されている。

一九五七年、中国では反右派運動が始まり、古丁をはじめとする、「満洲国」で活動していた文化人のほとんどが右派とされた。『遼寧日報』には、同年一月一四日の蔡天心「徹底肃清反动的汉奸文化思想——在辽宁省文艺界反右派斗争大会上的发言」（漢奸文化思想を一掃する——遼寧省文芸界反右派闘争大会での発言）を皮切りに、一月二二日の江帆「汉奸文艺的“新生”：民族灵魂的枷鎖——斥古丁的“新生”」（漢奸文芸の『新生』、民族靈魂の枷——古丁著

『新生』への批判)、一月二三日の謝挺宇「決不许黑帮文学復活——評文化汉奸徐汲平(古丁)的几篇作品」(秘密の反動組織の文学復活を決して許さん——文化漢奸徐汲平〔古丁〕著のいくつかの作品を評す)など、創作・行動・文化思想などの各方面から古丁を激しく批判する記事が相次いで掲載された。翌五八年三月、古丁は極右分子として、歴史反革命罪同然で逮捕され、懲役十五年の判決を受け、監獄に入れられる。つまり、古丁が逮捕された理由は、漢奸罪ではなく、右派とされたことであった。

遼寧省鉄嶺監獄が、古丁の最後の居場所となった。妻の曹顯明(戦後、古丁によって曹麗英から改名)は長男徐徹と相談の上、家族を守るために、古丁と離婚して夫婦・親子の関係を絶った(これは当時の慣例であった)。一九六四年、五十歳だった古丁は、六年間の監獄生活を送った末に獄死する。死因は肺病だったであろうと徐徹氏は推測するが、詳細は不明である。正確な死亡時刻もわかっていない。最後の六年間、古丁が獄中でいかなる生活をし、どんなことを考えていたのか、誰も知らない。政府側の調べによると、過去の行動に対する反省や自己批判文などを書かされたはずだが、それらも今のところ見つからない。

しかし、十五年後の一九七九年に、古丁は政府によって名誉を回復されている。つまり、古丁は「右派」ではなかったことが証明され、「文化漢奸」も無実であると政府が宣告したのである。し

たがって、古丁が「漢奸文人」であったかどうかについての議論は無意味なことになる。

注

- 1 松本豊三編『南滿洲鉄道株式会社第三次十年史』(下)、南滿洲鉄道株式会社、一九三八年。
- 2 古賀鶴松「教え子 中国人古丁(徐長吉)のこと」、『消息』一九九四年二月臨時号、一頁。
- 3 同前。
- 4 石川啄木著・古丁訳「悲哀的玩具」、『明明』第二卷第三期、一九三七年二月、七頁。
- 5 これについては、鉄峰が「古丁的政治立場与文学功績」で言及している(『北方論叢』一九九三年第五期、哈爾濱師範大学北方論叢編輯部、七四頁)。徐青氏も、古丁は東北大学に一年間入学したと語っている。
- 6 古丁「類敗」『奮飛』月刊滿洲社、一九三八年、二十頁。中国語原文の翻訳は、特に翻訳者名の記載がない限り、筆者訳である(以下同)。
中国語原文…「這算一種什么生活呢?書也念夠了,到這步田地了,還講什麼甲骨文啊,殷墟啊……胡說八道……」
- 7 徐薈「氷流社について」(关于「氷流社」)『左聯回憶錄』編輯組編『左聯回憶錄・下』中国社会科学院文学研究所、一九八二年、六三三頁。原文…到了「一九三三年」六月中旬,我的同学罗振宪对我说他发现了一位

印《新诗歌》的人是徐突微，不久，徐突微即向我们提出参加“北平左联”。我回答说：“可以参加。”

8 原文：有理論的指明，有實踐的正路，現已出版。

9 陸万美「敵の刀に直面して戦闘を続ける北平左聯」（迎着敵人的刺刀尖，堅持戰鬥的「北平左聯」）『左聯回憶錄·下』前掲書、六一一頁。原文：一九三三年七月，左聯常委又一次改組。（略）新參加的徐突微任組部長（但這人不就被捕後，很快就隨着特務到中山公園的“來今雨軒”，公開招待記者，攻擊共產黨和左聯）

10 中共北京市委党史研究室等編『北方左翼文化運動資料匯編』（北京出版社、一九九一年）による。

11 「北方左翼文化運動大事記」『北方左翼文化運動資料匯編』、六八〇頁。原文：八月四日 北平文总和左联，社联等团体为欢迎反战大会国际代表团来平，在北平大学艺术学院开会研究筹备欢迎事宜。由于叛徒告密，军警包围了会场，参加会议的十八名代表全部被捕。

12 陸万美「敵の刀に直面して戦闘を続ける北平左聯」（迎着敵人的刺刀尖，堅持戰鬥的「北平左聯」）前掲。方殷「裏切られたある會議を記す」（記一次被出売了的會議）『左聯回憶錄·下』。

13 岡田英樹「古丁論補遺（その三）——古丁転向問題始末」『文学にみる「満洲国」の位相』研文出版、二〇〇〇年、二六五頁。

14 筆者の二度目のインタビュー（二〇〇九年九月）に対する答えから。五歳偽り云々は、劉遲（疑遲）の手稿『明明』の思い出」（回憶『明

明』、一九九五年、五頁による。

15 「満人官吏日本留学の件」陸軍省関東軍参謀長 西尾壽造、一九三四年九月二十五日アジア歴史資料データベース。http://www.jacar.go.jp/DAS/meta/listPhoto

16 國務院總務庁人事処編纂『満洲国官吏録』、一九三五、一九三九年を参照。

17 劉遲（疑遲）『明明』の思い出」（回憶『明明』）、八頁。

18 同前、七頁。原文：我们是苦闷着的，固然各个苦闷，有着各殊的出发点。我们一向是哑巴或口吃的，虽然我们有着嘴。我们一向是盲目的，即不盲目，也是近视或远视的，虽然我们有着着一双眼睛。我们一向是耳聋的，虽然我们有着两只耳朵。我们是一团有着健全的官能的畸零人。

19 呂元明「植民地の統治のために神道を鼓吹して」（鼓吹“神道”为殖民统治服务）『偽滿文化』吉林人民出版社、一九九三年、三七五～三七六頁。

20 同前、三～四頁。原文：“……这种隔阂，即两个民族间的隔阂，最主要还是来自大和民族的优越感吧？许多个事实，比如教育设施，商品供应，等等：这种隔阂，只要是血肉之躯都会十分反感。不能无动于衷！”

“那不是隔阂，那叫差距。奴隶主和奴隶之间，征服者和被征服者之间，这种差距一定会有。天经地义的事儿嘛，唠叨个啥劲儿？”

21 同前、七頁。原文：我们都是聰明的，我們知道……倘不在吶喊里覓生，便只好在沉默里寻死。烟酒与女人，我们在这里自杀着。风花与雪月，我

们在这里麻醉着。我们的生命就这般无用吗？我们的光明，就这般低廉吗？

我们是苦闷着的，我们该当把苦闷升华，我们不当当把苦闷延长。虽然科学和艺术理论并不肯定“苦闷升华便是艺术”，但是我们只能把苦闷的升华算作艺术。

22 同前，十七、十八頁。原文：「长吉说……契诃夫和鲁迅都是医生，但他们不治生理上的病症。而是专门帮你纠正，改掉心理上的毛病，专治人们的灵魂！咱们搞的是精神病院专门拯救人的心灵！咱们这本杂志得多往这方向使劲儿！」

23 徐匆（古丁）「評陶明濬教授著紅樓夢別本」，『明明』第一卷第二期，一九三七年四月，二六頁。原文：「而另一方面，受着落後階層的盲目的支持的通俗文學，卻依然持續着迴光返照的惡勢力，全滿各新聞幾無不刊載着他們的「作品」。通俗文學的作者，利用着小市民的落後意識，在接二連三地濫造着一聯武俠·哀情·香艷·偵探的章回體裁小說，在阻撓着文學的前進。」

24 同前。原文：「這不啻是給通俗文學作了一張最漂亮的廣告，原來，我們的文化機關，給我們指示出來這樣一條「窄門」」

25 古丁「信」『知半解集』月刊滿洲社，一九三八年，一〇〇頁參照。

26 同前。原文：「因為寫農村非特不縮小文學的題材，而且擴充了文學的題材，我們知道現在不是僅只關在『愛』與『月』裡了嗎？固然，直到現在寫的農村小說的好壞又當別論，寫農村這問題自身至少是不該受到非難

的。（略）但是為什麼編輯室裡會聚了許多寫農村的稿件呢？我覺得問題卻在這裡。這決不是可悲的現象，毋寧是可喜的。

27 山丁「鄉土文芸與『山丁花』」，『明明』第一卷第五期，二七頁。原文：「是一篇代表鄉土文藝的作品。」

28 同前。原文：「是一位勇敢的嘗試的鄉土文藝作家。」

29 同前。原文：「滿洲需要的是鄉土文藝，鄉土文藝是現實的。」

30 同前。原文：「我們的國度裡底文壇，是把重點放在鄉土文藝上的。不論在時間和空間上，文藝作品表現的意識與寫作的技巧，好像都應該側重現實。」

31 山丁は「我与乡土文学」の中で、「私の提唱した『郷土文学』は、蕭軍との談話の実践であり、日本人が主張する「移植文学」に対抗するものであった」（我提倡「乡土文学」，是我和萧军谈话的实践，是针对日本人主张的“移植文学”的）と述べている（『梁山丁研究資料』遼寧人民出版社，一九九八年，一三三頁）。一九三四年五月に蕭軍は山丁に対し、これからの文学は、「一、新聞の文学に頼らず、単行本を出す。二、郷土の現実の暴露から出発して、「現実暴露」「真实描写」（一、不能再依賴副刊了，要出単行本。二、要从暴露乡土现实做起，「揭露现实」「描写真实」）と言ったらしい（梁山丁生平年表，同七頁）。

32 古丁「偶感偶記並余談」、『新青年』第六四号，一九三七年一〇月，十九頁。原文：「他终究是漂亮的標帖無異。（略）商人往酒瓶上貼標籤，為的是賣酒，而山丁往『山丁花』上貼標帖卻是為了賣標帖。（略）我不希

望因為不敢貼真正的標帖而濫貼。(略)文學該不是那樣偏狹的東西，我不主張文學局限在一個小天地裡。『鄉土文藝』倘若是有所謂的『論據』的話，也無非是大豆高粱的唾餘而裝在玉壺裡，好看一些而已。『松梅竹菊』，又何妨寫呢？只要是文藝的話。

33 史之子「夢語り及び唾吐き」(說夢以及唾痰)、『明明』第二卷第四期、一九三八年新年号、一〇頁。原文：理論呢，我不敢夢；因為倘有的話，該是官準的東西，有若無！

34 城島舟礼「藝文志序」事務會「藝文志」第一輯、一九三九年六月。原文：無間天地之大，芝麻之小。無論滄海之巨，粟粒之細。

35 李春燕「東北淪陷時期文學のいくつかの問題について古丁を評す」(就東北淪陷時期文學的幾個問題評古丁李春燕編『古丁作品選』春風文芸出版社、一九九五年、六一—六二頁。原文：山丁的这个主張，不是讓我們只着眼于农村的这块乡土，更不是只写大豆高粱，它的重点是，側重现实“和”把握着时代“，充分发挥文學的社会作用。因此，这个主張是很有现实意义的。而当时《明明》的同人未必了解此意，所以他们对乡土文學的主張进行了严厉的批评。

36 浅見淵『文學と大陸』図書研究社、一九四二年、一九頁。

37 古丁「閑話文壇」『二知半解集』、三頁。原文：『獨立の色彩』，是滿洲文壇上的新語彙，雖然並沒有聽到什麼明確地解釋，望文生義，似乎是『滿洲的文學必須是滿洲底的』的意思。(略)我希望不要由於這新語彙生出偏執的見解，不要以為把滿洲的大門緊緊地關起來，就能產生『獨立

色彩的』文學的。

38 古丁「支『閑話文壇』」『二知半解集』、八—一〇頁。原文：『獨立色彩』這新語彙，已經有了『明確的解釋』了，但一點也沒出我的臆測，不外：『滿洲的文學必須是滿洲底的』之意。(略)不過卻非新詞，只是『地方色彩』的別名，(略)(我們)卻是想要強調這『地方色彩』即高粱大豆的(略)但我們仍稱之為『地方色彩』，不相信這新語彙。

39 古丁「偶感偶記並余談」、『新青年』第六四号、二二頁。原文：忽然又想起了「一件事」：曰『明明的宗派性』，因為什麼有『宗派性』呢？因為不容『鄉土文藝』的理論和其論者。其實，這倒是猜疑。明明在行進中，也許是被看作有了一定的傾向的罷，但是，並無所謂『路』，同時也不願意有『導師』給指『路』，倘有自以為『導師』的攜着自以為是的經典來指手畫腳，我們是不憚唾棄的。所謂『我們』要包括疑遲，孟原，毛利和我。我們很希望有人着實的作，譯，為我們的文壇出品，為我們的文史填寫。

40 古丁「三味篇」、『明明』第三卷第三期、七二頁。原文：明明是公開的，並非同人雜誌，所以古丁以外的那位先生或女士的稿子是都能登載的。(略)文壇斷非某人的私產，他將要包容一切愛護她的人，扶育她的人。(略)唯其因為她不是某人的私產，所以想要據為私有的，也將因為不能私有而感到苦楚。(略)我希望憎古丁的人用他或她的作品來攻擊我。我是樂於把這一架不結實的木橋，換成諸位的結實的鐵橋的。倘不能時，那不是我的罪。

- 41 吳郎「謝絕批評的自欺欺人的大作家」、『大同報』文芸欄、一九三八年八月一四日。原文：表面上首先張着公開的旗幟來引誘一切關心的人，其後在用不合我們的水準的話來謝絕圈外的作者，骨子裡則整個的是同仁雜誌了。
- 42 S「生活與文章——『私語』之一」、『大同報』、一九三八年六月一日。原文：無論如何我也不相信，一個人一天在不愁吃不愁穿中跑到酒館內狂飲，搜招待開盤子，然後回到家高興之餘也寫一些不是『玩具』的文章，但無論他文章寫的如何好（其實絕不會好）然而我相信，在這樣生活中絕養不出高度的世界觀，他的作品也絕不會有真實的價值。
- 43 史之子「夢語り及び唾吐き」（說夢以及唾痰）前掲、一〇頁。原文：獨自開拓一條各自的文學道。
- 44 古丁「偶感偶記並余談」、『新青年』第六四号、一八頁。原文：不寫讓人看了起好感和美感的東西，不寫讓人讀了莫名其妙的東西，不寫讓人讀了樂觀的東西。
- 45 山丁「前夜」、『大同報』、一九三八年六月三〇日。原文：我們需要加緊製造大批食糧，只要是良心的，不管粗糙的，未完整的也好，供給那些（我們自己就是這裡的一個）貧乏又飢餓的大眾們。
- 46 徐長吉「日本對華的真意」、『盛京時報』、一九三七年九月二日。原文：這統是因為華方並不徹底地了解，也不想去了解日本的真意，日本的對華真意，只是親善、親善、第三個親善，日本想要跟中國親善的熱情，不外是想維持東亞永遠的和平、（略）對於中國的領土，也沒有絲毫意圖，這
- 47 種對待敵人的大乘的態度、是古今罕見的、（略）日本在上海的轟炸、是為了消滅轟炸、的轟炸、日本對華軍的膺懲的戰爭、是為了消滅戰爭的戰爭。
- 48 馮爲群「關於古丁就事論事答鉄峰」李春燕編『古丁作品選』、五八九頁。
- 49 一九三八年五月に毛沢東「持久戦を論ず」（論持久戦）が、週刊『解放』（一九三七年四月、延安創刊）第四三・四四期合本に發表された。
- 50 于逢春「滿洲國」の蒙古族に対する日本語教育に関する考察」、『廣島大学大学院教育学研究科紀要』、二〇〇二年二月、二〇〇頁。
- 51 古丁「話の話」、『滿洲國語』日語版、第五号、一九四〇年九月、二〇頁。
- 52 古丁「滿洲文学通信」、『文学界』第七卷四号、一九四〇年四月、一七一頁。
- 53 古丁「話の話」前掲、二二頁。
- 54 「小林秀雄を囲む」、『藝文』一九四三年八月号、六四頁。
- 55 浅見淵「文学と大陸」図書研究社、一九四二年、二〇頁。
- 56 史之子「注音符号」、『月刊滿洲』第十一卷第八号、一九三八年八月、一六二頁。
- 57 同前。

- 58 同前。
- 59 東野大八「駱駝祥子ロイヤルになつた男」、『没法子北京マイスター』蝸牛社、一九九四年、九頁。
- 60 北村謙次郎『北辺慕情記』大学書房、一九六〇年、一三四頁。
- 61 同前。
- 62 尾崎秀樹『旧植民地文学の研究』、前掲、九三〜九四頁。
- 63 毛沢東「持久戦を論ず」、『改造』、一九三八年一〇月、三九九頁。
- 64 同前、四〇〇頁。
- 65 同前、四一一頁。
- 66 鈴木貞美『日本の文化ナショナリズム』平凡社、二〇〇五年、二〇七頁などを参照。
- 67 古丁「談三 夢境」『譚』芸文書房、一九四二年、三八頁。原文…去年秋天、我同外文辛實二君到西安縣的一小村搜集小說材料。構想、理念都有了規模、待要動筆這頗有野心之作、便是新京的我家的東鄰大鬧黑死病、我一家的生命和財產同時受到了威脅。在市郊的千早病院里被隔離了幾乎一月、以為是該作為疫病的犧牲、不復作文了、幸而生命和財產俱得救、總算是不幸中之大幸。然而、卻自此以還、開始了精神的大震蕩。出了病院之後、一些朋友都替我很樂；然而、我卻陷入了大悲之中。因為我越過的是死線、即使跟人生怎樣、清談、也不會被理解的。我完全化為大孤獨。一直到今日、我的言和行、就都是我的一般朋友們所反對的。我的精神的大震蕩、直到今日也未會停止。
- 68 淺見淵「滿人作家會見記」『文学と大陸』、三三三頁。
- 69 杉村勇造「滿洲文化の追憶」、前掲、一四四頁。
- 70 岡田英樹「古丁論拾遺（その二）——内海氏の「古丁回想」『文学に見る「滿洲国」の位相』、二五七頁。
- 71 「出版社一覽」『滿洲藝文年鑑』滿洲藝文聯盟、一九四三年、二八九頁。
- 72 矢間（大内隆雄）「芸文書房のこと」、『滿洲評論』第二卷第一六号、一九四一年、三〇頁。
- 73 古丁「談三 夢境」『譚』、三八頁。原文…這之間、我曾經四處奔走轉勤外省、主要是想離開黑死病、我曾經賣掉了一處房子；曾經和縣太爺們混在一起當過一回大生徒；曾經離開了勤續了九年的大衙門、被派在一個半官的民間團體、坐最末的席次、（略）生活像這樣碰壁、精神像這樣激盪、即是怎樣健康的魂靈、倘不變成半瘋、也要化為半呆的。然而、我還有望、（略）就是想要在出版界裡稍微印一點好書、然而這事又是怎能奢望呢？我雖然當過一任統計官、卻是連加法都得攀着手指來算、不懂商情、昧於營利（略）但是、想了想、我已經越過了死線、即使碰壁又有何不可呢？
- 74 同前、四九頁。原文…我時常聽見一些偏見、即不讀日本文的書；這簡直是謬見、倘無這種風氣自然可慶、倘有也要及早革除的。
- 75 淺見淵「滿洲の作家たち」、『日本學藝新聞』、一九四二年一〇月一日。
- 76 山口重次「協和運動の大東亞戦争対策」、『藝文』一九四二年八月号、二四頁。

- 77 解半知「第一建國から第二建國へ」、『藝文』一九四二年三月号、五四頁。
- 78 古丁「『蜜月快車』を觀る」、『滿洲行政』一九三八年二月号、七一頁。
- 79 同前。
- 80 「解半知先生一夕談話記」、『麒麟』一九四二年二月号。
- 81 解半知「第一建國から第二建國へ」、前掲、五九頁。
- 82 「林房雄・古丁対談」、『文』一九四二年四月号、一四六頁、一五五頁。
- 83 同前、一四六頁。
- 84 鈴木貞美 解説「臨時増刊『大東亞戦争号』」、『藝文』第二卷、呂元明・鈴木貞美・劉建輝監修『藝文』第一卷復刻、ゆまに書房、二〇〇七年、六頁。
- 85 解半知「第一建國から第二建國へ」、六〇頁。
- 86 同前。
- 87 同前。
- 88 古丁には、民族協和を謳った他の文章「西南雜感」もある。詳細については、本書の第四部第三章第二節を参照。
- 89 安田敏朗『帝國日本の言語編成』真珠社、一九九七年、二五七―二五九頁。
- 90 丁（古丁）「思無邪」、『藝文志』第五期、一九四四年二月、六―七頁。
原文…固然、注音符號也有代替漢字的企圖、還是在註音方面所收的實效較為巨大。
- 91 同前。原文…近來、擬以假名標音漢字、進行調查、但並沒有對於注音符號的缺點加以人和指摘。這顯然是由拼音復歸到讀若法。（略）大東亞宣言已經聲明尊重各民族的傳統、漢字既然不能廢止、而區區的給無慮五萬字個漢字標音的四十個注音符號、即令毅然決然的採用、又有何不可？況且、這四十個注音符號又是學日本的假名而造成的。
- 92 「小林秀雄を囲む」、『藝文』一九四三年八月号、七二頁。
- 93 古丁「漢文で書く」（用漢文寫）、聯盟『藝文志』前掲、八頁。原文…日本人用漢文寫、有很悠久的歷史、而日本人用漢文的白話文寫、在我的寡聞裡、卻不多見、也許大內隆雄氏此集竟是一個開端。
- 94 同前。原文…文人的魂和魂的交流、須先有筆和筆的交流。彼此用對方的語言文字來寫和彼此用自己的語言文字來譯、都同樣是有意義的工作。
- 95 古丁「滿洲文學雜記」、『文芸春秋』第一七卷第二四号、一一〇頁、一七一頁。
- 96 『譯叢』、一九四一年一〇月。原文…須以移植我國土之日本文藝為經、原住民族固有之藝文為緯；取世界藝文之粹、而造成渾然獨特之藝文為目標。——「芸文指導要綱」
- 97 「翻譯研究会」は大内隆雄を中心とし、古丁らがそのメンバーであったことはわかっているが、それ以外の詳細は不明である。
- 98 大内隆雄著・沈堅訳「序」『譯叢』前掲書。原文…介紹世界藝文精華、是為了充實我們藝文創造所不可缺的重大任務。關於這些、在頭些日子發表的藝文指導要綱裡也有所明示。
- 99 「林房雄・古丁対談」前掲書、一五三頁。

100 読み取れない文字。

101 古丁（大内隆雄訳）「第三分科会 翻訳委員会の設置」、『文学報国』第三号八面、一九四三年九月一〇日。

102 山田清三郎「実践議決事項について」、『滿洲公論』第二卷十一号、一九四三年一月。

103 解半知「第一建国より第二建国へ」、六一頁。

104 第四部第三章第一節を参照。

105 文著「思無邪・凱歌を奏でずにやまない」、『藝文志』第七期、六頁。

原文…大東亞的局面、越發苛烈化了。在這大局面裏詩人都在戰列之中、歌詠着這大激鬥、詩人也在這大激鬥之中。（略）沒有日本便沒有滿洲國、也沒有中國。我們大東亞的運命、無論在歷史上和地理上、都是這樣立在「死生存亡、斷弗分攜」的大關係上的。這大關係一定要維持到永遠。

106 東著「思無邪・大感動」、『藝文志』第七期、六、七頁。原文…一個大感動震撼了我們的身心。那是大東亞戰爭的必勝。當今、捨此之外、再沒有更大的感動了。在這大感動裏、一定要產生我們的大詩篇。（略）愛我們的滿洲國、愛我們的親邦日本、愛我們的一切盟邦、愛我們的大東亞。保衛我們的滿洲國、保衛我們的親邦日本、保衛我們的一切盟邦、保衛我們的大東亞。

107 寅著「思無邪・讀書の生活化」、聯盟『藝文志』第四期、一頁。原文…一個民族的是否進取只有去看他們的生活是否健全與豐富。我們不得不承認自己的生活是太也病態的、貧困的了。

108 同前。原文…日本人是用讀書來豐富着他們的生活、不、簡直讀書就是

他們的生活的一部分、跟我們的打牌是生活的一部分、有着同樣的意義。

109 同前、二頁。原文…我們要從東亞先覺日本人學習的地方非常多、這讀書的美風的感染、也未嘗不是我們要學習的課程之一。（略）我們要把讀書娛樂化、挑那有趣的、自己樂於讀的、什麼書都可以、慢慢地讀下去、自然會改進自己的風俗、而成為思索的人類的、「我思故我在」

110 踪著「思無邪・兒童読み物について」、『藝文志』第四期、三頁。原文…要測度一個國家文化的深度、最直接的辦法、該是去觀察那個國家的教育、（略）因為初等教育、是每個國家教育中基礎的階段、（略）比中等、高等的教育階段更為重要。

111 同前、四頁。原文…不但按學校編印的定期讀物沒有、就連綜合的兒童雜誌也沒有。

112 同前。原文…對於兒童讀物、是該想一個徹底的辦法的、使能有幾種刊物在本年實現、帝國教育會是該負起這項責任來的。

113 知著「思無邪・上海書」、『藝文志』第四期五、六頁。原文…而若做成全國一元或數元的大統合出版、將是不難現出使我們稍稍滿意的幾本書來。我們願這企圖早日實現。

114 古丁「青年の責任」、『藝文志』第八期、八頁。原文…「康德文化」的精神、也就是淵源于惟神之道的建國精神。我們東方的精神文明固然有儒、佛、老莊的各種、而綜合了這些精神超乎其上的、卻是惟神之道。我們滿洲國的國本、奠定在惟神之道上面、的確是我們國民的幸福。（略）

我們的道義青年，唯有篤奉惟神之道，才能夠完成康德文化的光榮任務。

115 同前。原文：「從前的青年只知道有個人而不知道有國家，（略）我們的道義青年，通過了增產，勤勞，防衛，儲蓄，和國家打成了一片，各自在各自的份上，過着高度的國防國家生活。」

116 同前，九頁。原文：「有了堅固不拔的建國精神，更要拿這精神做基底，去鍊磨技術，譬如吉林豐滿水電達木是我滿洲國的一個美麗的象征，則那無疑地是民族協和的技術的結晶。凡是一切工作，（略）也都需要民族協和的技術，也就是道義的技術。因此，我們的道義青年，更必須在各自的分上去鍊磨各自的技術。這與其說是道義青年的責任，毋寧說是道義青年的權利。（略）在技術的鍊磨上，親邦日本，又是我們道義青年的良師。（略）我們的道義青年，只消虛心地學習，便能夠登峰造極的。鍊磨技術的目的，在於學習人怎樣驅使物，人怎樣為了道義驅使物。西方的技術，卻是人被物戲弄了，也就是人變成了物的奴隸。」

117 大內隆雄「最近的滴系文學」、「藝文志」第一〇期，四七～四九頁。原文：「雖然並不是沒有帶有時局的色彩的作品，但是很少，而且差不多都不過是機械的牽強的加上了一點新的觀念而已」、「只把素材換一下，現代文學的轉變是不可能的」、「要緊的是思想的鍊成」、「是新的世界觀的把握」

118 古丁「青年的責任」、「藝文志」第八期，九頁。原文：「大東亞戰爭，越發苛烈化了。我們的道義青年的槍後戰鬥，也只有越發發激烈化，才能夠獲得最後的勝利。歡喜力行，堅信不疑，只有努力向前。」

119 北村謙次郎「北邊慕情記」前揭，一四二頁。